宰主郎路生麻

# 計劃初

第十一

大班十三年三月、一万第三種郵便物即可 臨和九年六月一日要行(毎月

卷 第 六 號

### 題 字 大 西 生 長 路 = 郎

評月 行川脚铆 悼 武 JII 武 面 JII 王 橋 玉 白 柳 柳 鮮 川二 合 本 显 111 芽の伸びる夜 か 1= 滿 研 篇 綠 蟲 0 東 とこ 究 西 88 標 7= 研 落 究 な ろ 本 共 夫 掌 1: 穗 3 箱 頃 人 苑 麻 綿 蛭森梅 麻 岡 食 西 HI 子本秋 谷 111 生 田 田 滿 生 摩 某 省 路 南 陣 路 艸 那 0 郎(云) 火金一 二魚屋 郎(会) 人会 樂(至) 北(金) 居 (型) JII 各 本 粒 111 近 柳 社 11 路 西之町ME 100 地 作 柳 Ŧi. 創 集 1 柳 2 家 月 17 戶 柳 柳 祝 " 櫻 例 M 籍 1 調 欄 壇 會 儀 集 塔 樽 作 二路 麻 麻 福 Ш 柳 水 生 係 絲 谷 田 生 生 田 南朝 FIF 秀 山 鮎 翠 路 路 山 鞍 樓 雨 整絲 美 夢 郎 郎 雨 選(云) 馬 記 選 選 雨〇〇 (至) (皇) (图0)

白

藤

福

田

山

雨

樓(公)

編

輯

0

怒

山

雨

樓(北)

### 酒

### 淸

白

鶴

禮

讃

當選 貧 白鶴を一 白鶴 事 ゝ酒と言へば白 鶴 乏 でに白 意の 0 0 瓶たまることた 3 如く 本 中 鶴 h 10 樟 白 0 な 白 鶴 0 W 揃 鶴 鶴 古 持 容 T L 1: ま h か 0 た \$ V で で 5 3 T 6. 來 0 3 0 1 >

攝津灘 嘉納合

名



# QUE QUE E

天

か

瀨

溫

泉

小

景

零 30 滿 日 故 朝 學 落 0 校 開 話 鄉 曜 電 n から で 0 柳 日 話 T 寢 作 桃 8 す 儲 か 更 0 0 0 T 3 5 3 1: 洗 驚 陈 1: を 濯 畠 ٤ あ b 3 は ち で 3 5 青 な ٤ 蟹 藥 3 か 盜 T から 0 賣 な る あ 5 0 n 眼 b b b 3 3

٤ 水 嘘 to 洟 8 U 0 P か V 慌 3 ば T 後 P た を あ П 軒 養 ٤ 酒 持 子 如 から 氣 階 舌 から 1 1= 滅 慕 J: 3 巡 入 な b . b 3 b

九 作 柳 樟

路樽

11 後 高如

神戶

同天同同同春同

同同同某

選

郎

來

水

人

### Cacaca

離 兒 德 芥 2 先 帶 殺 球 2 3 青 か 内 女 緣 Te 利 < 0 则 0 1177 3 粒 鐩 春 T 午 房 談 抱 0 中 T 上 1= 0 を 0 n T 君 0 0 女 0 灯 端 夫 4. 12 押 To 母 無 居 \$ 夢 ナニ 山 は を 噴 馬 ナニ 空 T 3 跼 ٤ から ね 5 初 0 顏 は 心 3 花 0 水 ~ 祭 氣 \$ な こ 母 夏 3 0 12 3 中 を 勿 必 火 -1)-枕 む h E 行 0 0 死 か 照 直 體 0 ラ 十 < を T 2 白 を 3 3 ٤ 明 な 1= 夜 5 髪 L あ b 風 女 世 \$ ほ 吹 W 1 す 外 子 0 聲 勝 し な T 1 L 生. 4-٤ か 3 0 0 は 父 凡 枕 ٤ から 補 n 3 獨 を T 3 から T L 泣 夫 遠 は す 云 2 b 這 T P 3 無 居 T 醉 か 4. 2 b 3 戰 ひ な 3 ひ 1 3 3 3 ち b 2 T

同 4 205 大 大 Ш 阪 治 同 照 舟 同 大 同 同 史 沐 同 同 同 同 同 同 坊 主 F 天 2

### CHORECE CONTRACT

花 麩 奉 H 頰 逝 病 六 2 切 春 ス 落 夜 手 停 御 札 祝 通 紙 車 に 祝 向 1 + b 米 人 花 燈 活 冠 書 を は 踊 1 U U 飽 0 ぼ 春 3 け 生 明 b 10 -越 女 あ ייי 0 4 T 3 灯 0 0 12 逆 T 眞 夜 え 給 n 0 雨 人 頭 は ナニ 龜 花 2 15 殼 8 を 下 直 T 風 6 か 取 12 1-H 1. から な 6 3 を b 尻 打 To 瓶 ナ \$ 疲 5 恪 舍 b Ξ 뺩 3 蠅 5 8 目 0 淋 V 景 湯 n 氣 1 T 5 から V 春 ٤ 味 寢 0 L 氣 氣 多 緣 目 雅 30 戾 15 0 ナニ 寢 12 T 0 4 C 持 弟 は 0 立 b から す 寒 書 3 --土 h を 子 君 蠅 T 5 0 泡 To < ま \$ せ 3 3 < 五. 5 1= 掘 から 掃 あ 9 盛 來 3 h 更 月 8 彼 日 3 ま 似 2 h 3 え ナニ 飯 岸 T け 3 男 疋 帶 3 n 屋 箱 か 肥 L

大 Ħ 火 100 神 餘 如 阪 販 棐 同 九 同 同 巷 同 同 孤 同 同 彩 同 青 [ii] 泡 薬 巴 鶴 丽 光

# Character Contraction

夜 折 叉 犬 子 ほ 社 部 樂 親 雨 見 春 ほ 油 中 世 群 規 1= 0 h 泥 綸 垂 事 野 折 日 櫻 勒 屋 局 帶 n を n ٤ 居 から 3 球 から 0 n 0 積 働 T 讀 毛 5 n 外 0 あ 才 82 か h to ば 1 啼 む 1= 1 女 女 人 あ ナニ 3 to L. お 3 b か 4. 日 A 1 ייי Ξ 快 夜 げ 酒 + I 步 > 1 あ ٤ 4: n 生 0 ラ から 0 11 誰 b T から 長 人 味 筮 親 活 兒 F ラ " す か か P 筋 病 を 竹 父 殺 1 3 11 に 0 T か 0 知 1= 2 3 20 水 假 落 0 0 死 泣 3 0 包 0 0 見 な 1 香 L 6 1= 名 < n \$ 0 5 恐 2 苦 は T 上 3 ひ かっ 若 姉 2 に H から 日 3 3 5 な 3 世 5 合 か 話 わ 居 5 T 書 行 か 1 あ T b す 7= V な 3 額 n 7: b 3 3 瓶 3 \$ U n 3

大 大 金 奈 京 4 阪 部 治 觀 貴 同 晨 同 龒 同 菊 同 都 同 ナニ 同 代 習 U 月 朗 志 逸 路 魚 路

# **EXECUTE**

借 大 生 笑 物 春 夜 平 事 赌 あ 失 拾 花 à 3 埶 務 0 手 置 活 は 0 櫻 W h 職 2 祭 ナニ 10 3 0 から 前 0 せ 風 1= T 向 屋 b 8 窓 疲 b 長 親 俺 E 巡 貧 無 女 7= せ あ け 0 2 12 n 大 から 0 步 開 ば 駄 乏 丈 B 查 た 3 F 瞳 手 前 合 瞳 け T あ 4. 野 ッツ 人 心 T 大 な から 人 第 20 端 0 靴 ナニ 12 球 入 3 0 10 黑 は 早 ٤ 此 學 吸 な 75 チ 南 擴 な た 似 如 殼 5 は 2 5 天 聲 起 樣 T n お な 光 か 機 聲 n ٤ 0 から 0 1= b か け を は ば 5 初 1= 3 美 な 割 菜 T 12 6 T 1= 夏 言 3 で ッ ナニ 烹 集 5 け 居 0 去 U な 2 着 1= 3 T 3 3 服 癖 街 す h

大 今 大 兵 京 高 長. 京 版 治 都 JA 正美同 利 [ii] 11 光 同 映 [ii] 天 ni 柳 同 竹 败 生. 秋 兒 松 路 핾 珠 雅

# CACA CACA

靐 H 麻 競 女 盃 寢 童 春 此 銀 元 生 梯 宗 金 から 丽 ٤ 3 0 雀 13 客 を 7 教 月 111: 曜 合 П 1= む b 有 す 屋 番 界 30 段 多 か KE 鼻 0 0 難 n ٤ h な 0 頭 6 S 小 8 à 足 す 多 緒 味 0 卒 花 ほ 7 0 あ 5 ٤ ち 多 儲 ٤ 戀 僧 < 0) ğ 5 を から S T 知 V 1= 革 斋 世 誘 は 10 せ 4 6 T か げ ば 辭 淋 請 2 は 恶 命 5 3 ٤ 15 な 寢 吳 は n せ 段 5 15 0 合 0 H U n 青 4. 6. L n 3 T 負 3 女 3 夜 4 \$ た 中 4. à 宿 3 如 廿 V 专 空 狆 子 笛 瞳 貧 > に 10 皪 氣 寒 0 ٤ 茶 戰 T 0 を から 8 0 L 憶 出 居 死 象 稽 F 0 居 術 あ 13 抱 il: 會 1 體 香 す・ 臺 v 2 す b 2 駄 古 b 3 人 3

既 愛 同 同 大 松 高 嫂 酸 th 知 同 承 [11] 宵 同 蛙 梨 曼 愚 同 縷 同 同 虚 同 陀 羅 明 離 庵 春 糸丁. 華 子 生

# OF OF OFFICE

醉 踊 蔭 决 ル 朝 2 八 お 夏 T. 忘 朗 死 0 " 3 客 斷 1= 5 0 \$ 口 帽 3 面 6 n ~ U 手 3 塲 0 程 から 0 倦 器 8 か ~ 3 0 h 7= 所 B th は 鈍 怠 踊 之 3 た 1 1= 10 集 を 0 T 島 U. 仲 氣 人 3 を 5 お 神 待 T 金 な 7 見 公 舱 園 -經 1: 2 0 辨 心 0 な n 3 T DR 所 U B 質 せ T ٤ ば 飲 見 影 中 春 當 男 闊 乍 T 0 包 歸 は 向 き T 0 から 3 6 食 0 お > b 自 東 b ~ 82 冷 急 南 月 h Ġ 炊 0 子 花 0 煮 U. む え 3 To 汗 高 せ 女 ょ 3 から から を 12 いっ 去 3 T 1: を から 給 利 障 如 出 生 b 賞 P る 醉 T 高 た か 3 少 70 貨 子 7= 3 8 3 女 5 3 1 n ひ す h 俺

间 今 大 大 阪 同 或 伶 同 牧 同 朝 同 裸 同 晃 同 X 同 渗 人 人 丽 人 兒 路

### Cacaca

裏 子 片 5 ス 納 春 自 瞳 酒 智 春 ほ 手 0 押 7: 雨 轉 から U. よ 惠 0 3 打 骨 12 ば 7 道 收 2 ^ 車 け 出 h h 0 陽 1= に カ 1 B 20 ~ 13 來 から 82 から な ~ から ば 0 F 行 濡 いっ 细 2 乘 3 あ げ 味 い 風 3 時 春 75 V 持 0 ま 船 代 1= n n 方 煙 5 力; 春 T で 客 1= ٤ 畵 0 T 草 お ば T す 3 0 ナニ 0 な 4 產 0 來 な P 巡 人 櫻 應 IIII 妾 蛙 2 去 婆 强 ナニ 0 h 春 n E を から 頭 > は 0 4. ま 在 女 T ٤ 0 を 出 蜂 先 哭 を 3 3 0 理 3 多 0 は 뗈 個 1 2 力: 3 3 好 技 n な \$ 智 菊 繰 性 1= 2 Ξ P T ~ ٤ から 熱 切 3 巧 3 か あ で 返 池 遊 T 废 0 な か 來 見 今 な ほ 3 せる T 寬 す U 3 n 8 世 U 人 100 日 3: 3 3 見

K 大 火 检 埼 群 31 大 都 既 和 红 H JH 耳 既 T た 同 翠 雛 同 6 同 同 貧 石 v Ŧ. 流 a 代 兒 路 P 器 三 瓢 子

# QUE QUE QUE

戀 身 35 陽 醉 糊 制 を 七 絕 足 母 ±: け ٤ 1: 3 い 2 3. 交 袋 --8 服 + 0 1= 7. ま T 7 U U を 0 0 0 な 5 解 食 な ひ す 3 る 5 亡 議 手 繼 朓 母 ろ V 2 1. 0 2 子. 3 日 は 父 會 氣 げ 1= あ 鼠 氣 = から 紙 3 緣 を 0 0 T から 樂 回 談 は 人 明 ナニ 閉 若 を 換 1= ば ょ 忌 ŧ H 素 强 0 3 會 緣 山 針 3 腹 第 番 < 直 す 足 3 0 比 談 豊 0 3 ^ 每: 率 1 3 奥 谷 音 1: あ 3 泣 12 聞 3 す 身 は 夫 ~ 立. 聞 2 0 か 祖 紅 を 母 ナニ 3 1. 3 金 0 0 10 通 法 母 ま な 强 から H 3 10 0 E T 事 起 氣 な 行 る 1 か 5 來 n 0 4 6. 智 愛 ろ 頰 筒 3 3 T す 3 b U 3 3 せ

	神	優ケ池	京都	<b>强</b>	為根	神戸	火阪
同	明「	司志津	同白	同一	同與詩		同元
	坊	女	英	更	雄	雄	Щ

# Character Contraction of the Con

住 先 本 公 慕 庭 T 7 相 \$ 1: = 大 卒 無 春 休 ス 思 味 地 0 當 F 職 筆 聲 業 精 ル 生. Da 日 0 F. 樹 す 線 0 20 \_ 髭 駄 プ 30 30 0 ŋ 4-月 多 女 あ 0 拔 後 Ξ ス 出 春 齡 L 71 I. 3 葉 12 1 腦 3 步 山 負 0) 15 吞 鳴 本 4. せ T 12 を it 雪 0 h b 1. 病 T 债 4/5 ٤ ば 幅 背 女 銮 から 見 To 3 る T 人 馳 給 0 は 櫻 廣 院 40 柑 杂 晴 明 CK 0 3 泰 b け 1= から な 7= 如 買 5 h 0 日 L 1: 30 話 T 肩 足 F 氣 5 L 1 < す 3 散 0 5 震 55 早 街 來 駄 雪 聞 h で ね 4. 1= から T 働 0 現 しつ から 2 10 から 3 < 1= T To は T 實 か 去 舞 な 寒 8 る 5 來 な 6 見 0 3 5 1: n 1= え × 3 b 5 な 3 5 た 3 6 à

同 石 4 高 取 311 始 18 吉 絃 法 同 義 [ii] 同 同 [1] 小 同 同 耕 珍 左 泉 風 7. 子. 右 靖 樓 丽 朗 景

### OF OF OF OF

3 萬 新 貸 本 春 合 重 光 菜 大 閣 春 粉 80 せ 白 入 人 H U 役 人 産 歲 學 plan. 0 B か Ł 粉 生 0 3 を 0 食 堂 生 V 7 6. 花 0 基 傘 ナニ 縫 1= 肩 7: 3 点 無 金 散 2 心 育 盛 首 酒 0 時 ds 頭 羅 L 拙 氣 h 0 別 ~ 境 無 機 な n 5 至 7 紗 3 味 犬 0 6 を 智 6. 落 0 伸 玄 屋 を 嫁 1= 6 子 3 窺 守 0 等 尾 U. から 思 闊 暗 は 化 3 to 居 F は 3 連 世 3 から 1= 眼 から 3 U b 4 見 0 + n 關作 淋 せ 子 C 隅 か 3 春 T T 10 ズ 女 ٤ から から 5 1 8 撫 力的 0 7 0 見 歸 0 行 10 出 1 n 4. 吧 T あ T 1 0 グ b 來 な L 3 1 3 醉 雨 < W 3 b 4

4 石 京 松 大 治 m pli 絮 松 么 同 同 清 L 同 規 同 沃 同 耕 同 萬 ٤ 花 子 U 零 堂 里 朗 雷

# Cacaca

U

よ

5

さ

h

~

3

10

ds

な

答

U

T

3

15

泰

髛

踊

眞 母 梅 野 初 支 看 継 酒 節 歪 チ 0 Ŧ h 1 親 良 雛 護 白 那 1= 0 淋 分 T 0 F 4. は 仕 を 人 婦 似 粕 0 3 南 1 富 花 は 賣 事 馴 0 ٤ た 燒 3 + + 丸 U 自 驛 から 3 10 富 n 喧 甘 何 夜 4 0 附 話 分 ٤ 氣 0 新 近 す 嘩 < 1: T U 10 re 所 T 聞 0 追 更 見 3 は を 子 は 語 知 彼 を 付 は V な 0 で 肴 守 夜 3 高 n え 5 < 4 氏 T 0 あ す P い ば T 12 0 0 妻 を: 落 3 多 嬉 聲 埶 姪 客 Ti. h 6 書 0 5 + 月 感 ٤ から から ٤ を B し 目 蠅 0 な 留 T な 折 待 5 勝 出 居 に か h 7: 日 b 守 飯 5 3 b ち る 6 T n

illi 大 東 间 大 4 大 大學等 兵 曲 检 名 岡 大 古屋 康 74 n 阪 Ŕ 陂 治 陂 T 版 醉 狂 潮 4 有 比 誠 新 茂 H. = 遊 里 嗟 ŧ + 八 女 鈴 朗 美 爾 丸 魚 志 風 郎 羊 男

# CHE CHE CHE CHE

病

院

12

7

皮 思 御 H ル 泣 歸 0 5 71 隣 G 0 = T 1-出 0 H n 見 4. は 謠 を ナ た 花 13 黄 曲 娘 かき 5 部 E 3 は 16 受 3 屋 強 h 1 1 驗 3 書 養 な 褪 0 休 林 30 包 に 5 兒 せ h U 哭 た ナニ To T い ts から 雜 外 3 T 困 は 記 務 な 2 0 員 す 帖 b h 鐘 3

旅 里 儲 尻 V U 0 歸 1-P 丽 3 な 4 宿 祖 胩 h 0 母 1= 1 線 小 は な 路 說 髮 1= b 借 撫 W 舞 0 T 妓 0 肩 0 T \$ お 多 讀 嬢 撫 3 3 h 3 T

長 1 遮 仕 屋 か 風 呂 5 0 # 出 櫻 ナニ た 0 を 自 白 土 粉 \$ 動 1: 0 車 から to 手 0 から 通 B 響 柔 L 0 から か 3 T 3 b

京

白 良 榮 香 た T 0 之 3 吉 襲 佑 ち 月 助 吉

久堅 梟 あき

人

æ

5

湖 寒 木 蛇 之 山 草 通 助

告

# M君焼香場にて

# CHECE CE

醉 3 酒 踊 春 來 體 淋 即「 抱 遠 弟 說 目 П H 元 鏡 h 溫 か 内 雷 年 肥 明 3 0 櫻 不 表 付 3 n ナニ か re 0 10 帳 智 手 h 雲 履 U 12 0 を T ٤ け 若 から 犬 ナニ 3 妻 で T MI. 誰 3 は 出 + かい 胚 10 H n 言 齒 " ょ 淋 0 色 0 子 附 酒 書 h 0 8 供 霞 は 0 添 1 U 重 實 から 3 H 0 12 0 T 6. 稻 云 3 あ お 家 產 0 襖 1-を 味 乳 す 煙 居 風 妻 は 1= から 婆 に 真 1: す 5: 50 持 4 10 3 す 3 b を 0 調 を U あ あ 1: 褪 突 から あ 3 5 0 5 OK 6 n 僕 3 0 0 à × せ 废 交 1 桃 え 共 から T 0 ば 7: か 12 b か 3 た 唉 返 0 换 JI. 似 拔 な よ H 見 14 せ 鶴 T 3 3 花 げ 1 h U 3 よ 手 b T

间 大 八 同 网 4 大 福 同 御 糖 被 治 81 + 笛 + 斜 ラ 守 IE. 五煎 栗 佐 晴 美 仙才 ייי 津 七 1 津 夫 羊 秀 Ш 親 助 舟 美 郎 風 女



麻

三月十八日午前九時四十分ハルビン發、 午後

ピャをくゆらしながら自問自答した。 一夜泊りのハルピンが私に何を致へたか』と、私は二等暖意了の上に接轉んでス 十時三十分泰天着 松代さんの來奉

のであるか、どうか。私は美しい虹を観て來してはなからうか。そんなことを考 てたこ、それが私の眼に映るすべてである。 さいれた程、一瞥のハルピンは異色異香の都會であつた。 私のこの二つの眼が視たハルピン、それは一つの事質ではあらうが、真實そのも 今朝ハルピンにアデューした汽車は果てしなき曠野を走つてゐる。灰色の雲と東

私の向ひ側の寢臺?では黑い服にくるまつた老満洲人が眠つてゐるのか、横になるとなるない。

外づしの出來る腰掛がくつつけてある。 つたきりである。 私の寝臺?の下部は三人詰のシートになつてゐる。老満洲人 ートになってるて、床の窓際には一寸したテーブルが置かれてある。 下部も同じく三人

-( 16

下部が三人詰になつてゐて、これは客の好みにまかされてゐ は夜行列車が運轉されてゐない。從つて上部の寢臺了が一人 まだ~~多少の危險状態におかれてあるハルビン新京間で

**贅澤をしたことを經験した。** またながら牲路はシートナムバアがあつただけに、七国弱のありながら牲路はシートナムバアがあつただけに、七国弱の 同伴者のない私は逸早く、上部を占據した。同じく二等できたと

迚も乗れないし、四等は苦力専門ですとの話だつた。 だと聞かされた。三等はシートが板敷で、車内が汚いので、 この外に一等があることは勿論だが、二等に四等があるん

數株の立樹がパラパラと線路に沿うで立ち並んである。 て、各自の視線が窓外に向つたらしい。小驛を左右にして十 のたが、糖て汽車が途中の小驛にすべり込んだので期せずし をトランクへ押込みながら、その値段について話がはずんで 行である。暫くはハルピンで買つた奥様への土産の狐の標卷 部の六人は何れも、何々議員の肩書を持つた視察團の一

と他の一人が應じた。他に意見を出す者がゐなかつた。彼等 『なアに、白樺さ』 と一人が云つた。

『アレはポプラだネ』

貰つたことは有難いと云へば有難い。 に對しては恰も猫の如く柔順であることを思はされた。こんだは なところで、官費旅行の視察園なるものをハッキリと視せて は白煙説を鵜呑みにしてしまつたらしい。私はこの立木につ 實際問題に對しては斯くの如く無識であり、押しの强い一人というには、 たの議場では甲論乙版なかくにっことを知らない彼等も もありません。どろやなぎで、楊柳の楊の字です』と教はつ いて満洲在住の人に訊いて見た。『それはポプラでも白樺で

くすぐったい氣持になった。 をしなければならない私にとつても、五十歩百歩だと思うと い郷國の人達を氣の毒に思つた。そして歸阪したら鮮粛の話 私は彼等の錯覚だらけの視察談に耳を傾けなければならない。 17

ですといふ人とがありますが、前者は浪の荒い時に行つた人 にしたところで、それに近いものであることは云うまでもな 半面しか見てゐないのだと喝破してゐますが、私の鮮滿紀行 で、後者は浪の靜かな時に行つた人であつて、どちらも情 いところですと云ふ人と、イヤ和歌の浦は波の靜かなところ い。すくなくとも一年位のなければハルピンを語る資格はあ 漱石が、ある小説の中で、和歌の浦といふところは彼の荒

乗替えた。これからは又三等が行だ。 新京驛で再び柳陽君に迎えられた。こゝで新京發の汽車に が京屋で再び柳陽君に迎えられた。こゝで新京發の汽車に

#### ×

話ではないと思つた。 話ではないと思つた。 話ではないと思つた。 話ではないと思つた。 話ではないと思つた。 だと云つてあたが、こちらはエライです、三十分 のようででする。 のように話してあた。 ののようなものを喰べて のと、いかにも辛さうに話してあた。 このようなのを喰べて のと、いかにも辛さうに話してあた。 このようなと、 ののようなものを喰べて のと、いかにも辛さうに話してあた。 このようなと、 ののまったが、 このようなのを喰べて のと、 ののまったが、 このようなものを喰べて のと、 ののまったが、 このようなものをし、 ののまったが、 このようなものをし、 ののまったが、 このようなものをし、 ののまったが、 このようなものをし、 ののまったが、 このようなものをし、 ののまったが、 このようなものなら、 ののまったが、 このようなものなら、 ののまったが、 このまります。 ののまったが、 このまります。 ののまりなれない。 にのまります。 ののまりなれない。 にのまりなれない。 にのまりない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 にのない。 

#### ,

すぐつたい感じがした。
私の前のシートに、ロシャ人が乗合はした。そしてレッド
私の前のシートに、ロシャ人が乗合はした。そしてレッド

私も負けん氣を出した譯ではないが、彼の持つてゐたハル料でな手へ渡してやつたら、バラくと選げてゐたが、市の大きな手へ渡してやつたら、バラくと選げてゐたが、市の大きな手へ渡してやつたら、バラくと選げてゐたが、市の大きな手へ渡してやつたら、バラくと選げてゐたが、市の大きな手へ渡してやつたら、バラくと選げてゐたが、市の大きな手へ渡しているので、彼れの大きない。

るればい、時代が一日も早く來ればい、と思つた。 しんだ。この點から云つて自國語と世界語の二つさへ知って しんだ。この點から云つて自國語と世界語の二つさへ知って 語も佛蘭西語も何語も何語も學ばなければならない私達を悲 になる。 これな時、満洲語も露西亞語も、朝鮮語も、獨漢語も英

#### ×

を大まで戻つて來たのは夜の十時半だつた。モウ勝手を知を天まで戻つて來たのは夜の十時半だつた。モウ勝手を知れたいふ友人と一緒に來てくれてゐた。隨分寒くもあるのですぐに出かけやうとすると、みつる君が、

と云ひながら、眼で私の出て來た方を探がしてゐる。私はハッとした。松代さん?と私は信じられないほど驚いた。そこっとした。松代さん?と私は信じられないほど驚いた。そこれた柳路君にはすまないが、今度はとても柳路君には會へまれた柳路君にはすまないが、今度はとても柳路君には會へまい。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。熱河の奥にゐては奉天まで出て來てくれとも云へない。私行程に縛られてゐる私としても出かける譯には行かない。私は八と云ひながら、眼で私の出て來た方を探がしてゐる。私は八と云ひながら、眼で私の出て來た方を探がしてゐる。私は八と云ひながら、眼で私の出て來た方を探がしてゐる。私は八と云ひながら、

たのである。私はロクノー挨拶もしないで柳路君のことを訊いたのである。私は「妹」にでも會つたやうな悦」びと「懐しさとたのである。私は「妹」にでも會つたやうな悦」びと「懐しさとたがである。私は「妹」にでも

『安では話の出來ぬことがある、すぐ來いと云つて電報をした介ですが、まだ何んの返離も來ません。みつるさんと妾でたのですが、まだ何んの返離も來ません。みつるさんと妾でなって重報をしていると思ひますが……』と松代さんは息をはづませてゐた。

私が新京、哈爾賓から引返すのを待合はしてゐる間に以前

親切には思はず頭が下つた。
とを依頼しに出かけてくれたさうである。その熱情、そのことを依頼しに出かけてくれたさうである。その熱情、そのたちである。その熱情、そのたちである。その熱情、そのたちでは、

よろこびがあつた。 魂と、魂との抱擁があつた。 と知らない。しかしながら距離と費用を意に解せず、熱河のら知らない。しかしながら距離と費用を意に解せず、熱河のない。とれるとなった。 とれは表演を表してあるが、どれほど遠このか、それすると、

とかんでは、かつる君と、松代さんと私の四人の山静君と、みつる君と、松代さんと私の四人のはなった秋ではない。

いった。『権兵衛』の女將は私たちのよろこびに拍車をかけてくれた。『権兵衛』の女將は私たちのよろこびに拍車をかけてくれた。『権兵衛』の女將は私たちのよろこびに拍車をかけてくれた。私は珍らしくビールを飲んだ。

奉天第一の娼家も時間が選いので娼婦は観られなかつたがでまた。 いっぱいころだった。 はないない ころだった。 これがお茶を啜つてゐたのは午下康里の艶樂書館の一室で四人がお茶を啜つてゐたのは午ではない。

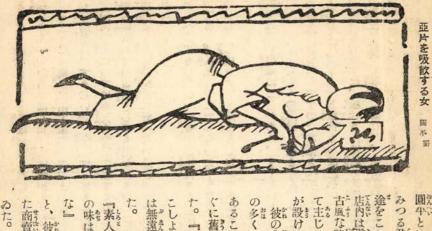
奉天第一の娯家も時間が遅いので娼婦は観られなかつたが奉天第一の娯家も時間が遅いので娼婦は観られなかったがとか何んとかいふ唄を唄つたり、踊つたりして感興をそへてとか何んとかいふ唄を唄つたり、踊つたりは

# 十九日塞天見物——泰天句會

宿のすぐ向ひに、奉天名物の人形屋がある。主人公は小倉



自由人だ。



て主じの應接兼事務室ではないようでに関して主じの應接兼事務室 店内は洋風の陳刻だが 途をこうへ寄つて見た が設けてある。 る君と別たしの歸

こしよすぎるネーと私 10 ぐに舊知のやうになつ の多くが親しい間柄で は無遠慮なことを云つ あることを知ると、す 彼の友人と私の友人 『泥人の手際がす

た商賣の悲哀を持つて と、彼にも趣味から出 の味は判りませんから 『素人にはホントの泥

> 揮した。 僕が案内しませう、 嬢の人形芝居の天才振りや、石原青龍川君が支那之居の研究からはないはる 言傳かつてるた人や製作上の疑義を質したり、風平さんの愛 から北陵見物に出かける積りだと話したら、 家として そこものると思ふと私は口をつぐんだ。それから紀太君に 権威者であることなどを聞かされた。 すぐあとから出かけます。と自由人を發 『それだつたら おひる近く

こへしづか君が來てくれた。しづか君の満洲語のてなみは昨 夜平康里で拜聽してゐるので心强い譯だ。 みつる君と私は 一日宿に歸つて自動車の用意を命じた。そ

筈だ。 の風姿をしてやつて來た。 関平さんはもとく 書家はので北陵保存のために盡されて 『よく満洲人と間違へられます』といふ。満洲國大人

の驚を縛りつけて騒いでゐる。彼等の一人が退窟凌ぎに撃つつてゐるが、少しのいかめしさもない。道傍の樹の枝に一羽 たのであらう。臨時私設の秋川道譯官が早速彼等に談しかけ 北陵の前に、満洲國の巡査が七八人のる。何れも剣銃を持たち、 タッタ一發で射とめたと自慢してゐます。實際あんな彈で

巡査のノンノン振りを内地の巡査 撃てるものではありません」との話。それにしても満洲國の

てゐる眼に、こゝの石島の太くて、

短

い、兩脚で、

ボンヤリ立

始末書だ、罰俸だ、諭旨発官だと ることだらう。一寸したことにも 加減、風のやうにやつて來だ私に を鳩のやうに遊ばしておく満洲國 う。こんなところに七八人の巡査 生きてゐるかがハッキリするだら 騒いだり、 に見せてやりたい。さぞ羨ましが は流石に大國だ。そのノンビリさ も羨ましいものがある。 いかにせゝこましい世界に 騒がれたりしてゐる彼れ



北 天

何んとなく親しみを感じる。

かい

ボンヤリと立つてゐる姿には

たる雄姿は見てる眼を疲れさせる

の方に多くの興味を覺えた。 れないかも知れないが、私にはこ

頻ぎ

つてゐる姿は迚もぶさいくで見ら

早く紹介すると鯛や平目が泳いで 施された影彩は佇立久しうせしめ る朱塗の柱や石門石階石欄壁間 ころだ。 るものばかりだ。 ゐない龍宮そつくりだ。 要するに北陵の碧甍黄甍を支え コレをてつとり

入口が

陵墓で境域の周圍約二里、

は清朝第二

の兩側には石獣の獅々、 ち正門を潜ると松の緑、

象等が並んである。内地の颯爽たる銅像の馬を見つけ

『北陵は幸的だよ、あれを買つて來て、道頓堀でキャヴ 私が歸吸してから、畵家の口君

21

ら、半圓形の壁に関まれて寝めが 手殿である。殿の背後に明樓があ

ある。太宗文皇帝を葬つてゐると

思門を潜ると隆恩殿、

これは廟の

次に碑樓、

その次の三層樓の隆

らしいのには顔負けした。 アレーをやつたらよく流行るだらう』 と云つたら、人のよいの君がホントに買へるものと思った

徒が剣銃を手にして警戒にあたつてゐる。一寸内地では見ら られた。今ではその兵舎の一部に日本國民學校が出來て、家 れぬ圖だ。 を有する大規模な兵舍の殘骸に、戦禍の慘をしみべく思はせる。 であられもない御姿をあらはし給うた。 みだも金とかで、奇怪な男女変歡の天地佛ももとより金次第ある黄色の布を取除いてもらつて本式の御開帳となつた。ある黄色の布を取除いてもらつて本式の御開帳となつた。あ 次いで満洲事變戦跡の一つである北大營を観た。五十萬中 から、喇嘛塔のある法輪寺へ廻つた。エロ佛の腰間に

から秦天全市を俯瞰した。 こっから城内へ引返し、吉順百貨店(満洲人経営)の屋上

いが愛嬌がある。一銭やりかけたら、 傍から驅けて來て手を出した。こ 唐子、美人の卵子ではな 『やつたら幾らでも來まつせ』 街を歩いてゐたら、六つか七つ位な可愛らしい女の子が路

> うの方からバラバラツと驅け出して来たっ と、みつる君が教へてくれたが、もう遅かつた。なるほど向

『一銭は多すぎます』とみつる君が云つたので、私はハッと

顔の調子をもつてゐるので、暫く振りかへつて見てゐた。 さんが私の顔を見て帽子でもすすめるやうにいふっ 『買つたらどうです、アレで三圓なら賣るでせう』と、圓平 私は最初に手を出した乞食の子の顔が、いかにも聞らかな

妻の勞苦が容易でないことを思つた。私の家に、一人か二人 一人殖えて、六人と七人では生活費は問題でないにしても、 うかんだのは私の家庭に今六人の子どもがゐることだつた。 に、これも断念した。 つたであらうが、北陵で欲しいものが持つて歸れぬのと間じ の子どもしかゐないのだつたら私はあの乞食の子を買つて歸 ないと思つた。私はすぐにも買ひたかつた。しかし私の頭にないと思った。 三圓・三圓なら、私は持つてゐる。あの子が三圓、惜しく

りすると黑すんだドロドロの泥の中へ踏込むのでアッチコッ でゐるのを素見して歩いた。路の悪いこと夥しい。ウツカ チと路を選つて飛びくに歩いた。 へ出た。そして城壁に沿うてインチキ商賣が目白押しに並ん 四人は小盗見市場の方へいそいだ。私達は城壁から一旦外

関平さんに、ここの案内を頼んだら、

と駄目をおれた。

さがある』と云つてゐたが、活い方がいゝんだ。そこに面白

歩いて、大便の中へ足でも突込んだら大變だ。 『いくら汚ない方がよくつても、コレではたまらん』と思ふ『いくら汚ない方がよくつても、コレではたまらん』と思ふ

つ突いて歩いた。
シャ体等してゐたが、一旦男が、どんなに汚くてもいっと
少々降等してゐたが、一旦男が、どんなに汚くてもいっと

圓平さんは

この横が五銭の浮電館です』と云ひながら、サッサとその 「この横が五銭の浮電館です』と云ひながら、サッサとその 「この横が五銭の浮電館です」と云ひながら、サッサとその 「この横が五銭の浮電館です」と云ひながら、サッサとその

そして家の前を、往つたり來たりしてゐる男が、彼女達の

大なのである。もつとわかりよく云へば稼いだ金の消費者である。

『どうです、這入つて見ますか』

ニャニャされても仕方がない。こればかりは願ひ下げにしたと、云ひながら関平さんが私の方を見て、ニャニャした。幾ら

れた。(前壁季天句曾々報参照)

石原青龍刀君の好意を謝して別れた。 地線表も顔を見せてくれた。散會後、平康里でも御案内しま 連樂君も顔を見せてくれた。散會後、平康里でも御案内しま せうといふ青龍刀君の好意を謝して別れた。 せうといふ青龍刀君の好意を謝して別れた。

戸外は雪がちらちらしはじめた。

滿洲へ滿洲へ金の要るところ、北陵に來て良心を疑へり。 線 の り は 直 線 馬車に我が人生を托しゆく

# 阿喜良、仙淚、矢車君等の案內二十日撫順炭坑露天娲見物

々間に合はなかつた。夜があけても、まだ姿を見せない。戸く\*\*。ないに柳路君の來奉を期待してゐたが、奉天何會には遂

外は雪で真い白だつた。

で気を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。
は気を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。
は気を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。
は気を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。
は気を配つてゐたのは私ひとりではなかつた。

「撫順の句會へは來るでせう」

と松代さんが突然云つた。同じ考へが彼女の頭の中を絶えずと松代さんが突然云つた。同じ考へが彼女の頭の中を絶えず

洲連になってゐることを知った。 性來してゐることを知った。 作本。 は一次では、 は一なでは、 は一なでは、

がドンく煙をあげである。馴れない者には安心しであられ

と云つたので、みんなが笑ひ出した。小屋が乗せてある枕木

をすまし、同所の屋上から撫順の街の輪廓を知つた。阿喜良、仙淚兩君の案内で撫順の満鐡地方事務所で、

×

こんなことは全く例外ですよ』と阿喜良君が談してくれた『こんなことは全く例外ですよ』と阿喜良君が談してくれた『闘車は石炭穀を再び炭坑に運んで、掘つた跡から、それを埋めるための役目を持つてゐた。私達は車上からやす/~を埋めるためで、現ですがら、大山に向った。

はないます。 また いっぱい はいか 見渡す限り雪で真つ白だつた。幾里走つたのか知らないが 見渡す限り雪で真つ白だつた。幾里走つたのか知らないが 見渡す限り雪で真つ白だつた。幾里走つたのか知らないが でる ( ) めでつてゐるうちに大山坑に着いた。石炭炭を穴の 中へ落し込む作業をしてゐる間に私たちは、山の上の方に登中へ落し込む作業をしてゐる間に私たちは、山の上の方に登中へ落し込む作業をしてゐる間に私たちのと許からもプス・( ) 煙が 立ちのばる。私はそれへ用便をしてみた。煙が一層旺んに立ちのぼる。これを見た私が ちのぼる。これを見た私が ちのぼる。これを見た私が

ないところだっ

×

舞を兼ねて出かけた。 舞を兼ねて出かけた。 舞を兼ねて出かけた。 舞を兼ねて出かけた。

をした。氏が情熱の人であることを知つた。 という では、いかにも病人らしく頭髪を逢のやうに激し、 をない ではない いかにもまで應接された。ものの十分ばかし散談をした。 これがはない かにも 病人らしく頭髪を逢のやうに激し、

云はれるままに私たちは好意の自動車を句宴場日の出館へて下さい』

と集まつて来た。松代さんが曾で在住の地だけに、松代さんにゆつたりとした氣分になれた。定刻になると、柳人が續々にゆつたりとした氣分になれた。定刻になると、柳人が續々にかられている。上順の一流らしい。非常

を中心に朗らかな話が展開されてゆく。ボッノー作句をはじを中心に朗らかな話が展開されてゆく。ボッノー作句をはじを中心に明らかな話が展開されてゆく。北ッノー作句をはじを中心にらしい。時間は用捨なく經つてゆく。九時過ぎだ。舟れないらしい。時間は用捨なく經つてゆく。九時過ぎだ。舟んな並んだ。寫眞屋がしきりに焦點を合はしはじめた。凡みんな並んだ。寫眞屋がしきりに焦點を合はしはじめた。凡みんな並んだ。寫眞屋がカメラい前に立つた。連続は出来た。まさにシャターを切らりとしてゐた時に、廊下の方にあた。まさにシャターを切らりとしてゐた時に、廊下の方にあた。まさにシャターを撮るといふ意識が離されならといふところで、室内の煙草のけむりを追び出すた。まさにシャターを切らりとしてゐた時に、廊下の方にあた。まさにシャターを切らりとしてゐた時に、廊下の方にあた。まさにシャターを撮る手を離した。

歌け込んで來たのは待ちに待つてゐた柳路君だつた。

一先生ツ』と云つたまま柳路君は何も云ひ得ない。
たち言葉が出ない。二人の眼と眼がすべてを語り合つた。
ならきをといった。 一人の眼と眼がすべてを語り合った。
ならきをいれてい。二人の眼と眼がすべてを語り合った。
ないはい筆は、この一瞬時に於ける劇的光景を細叙する力を持たない。



島城·超且阿口濟·坊念十萬潑

#### 夜一の順撫

楊柏樹 す熱河の に胸を跳 と知 ひさうも も間に合 凌なが 取 私に會 を手に 3 5 るとい さん よろこび 初上 るなり、 b \$ L 日程 とて した をあ あ T 0) 0 え 8 取 3

の電報 各地を旅 時代に私 だっ さなかつ

イトや

ば柳路君と私との

交りは一

モ

ウ

年次

になる

いまでにう

か

0

は二度ほど上京し

たっ

0 0 彼が 私智

0

も終生忘れ

この夜の

ても私にとつ

C

あ

3

川紫

くまで語り合つ た私は、彼が心の落ち 彼は松代さんに川柳をうるつけた。 の後グンく た 一つて来た。 から旅 撫 順川柳 ることの出来な 松代さんと結婚をし 10 と渡り歩い 社の句會は柳路夫妻に 2 と伸びたことは諸君の つく 度は高圓寺の n を最後 は ところを見つけたことをよろこん 吸後に彼はこ た ٤ 何會となった。 大阪時代には鳴尾 たことを手紙 彼のかれ か> L 心に痛 聴明な松代さんの 知る通り 川だり とつ

歴史的な句宴の主客 族人でなけりや 立 派 な 否 もにともに感激した。 3 仲

これがその夜の私の軸吟だつた。(前界無順句會々概念順

着陸する 一會ひたい と語れ は飛 から h 行機 る彼れ 6. 4. で辛う の氣持 0 To 心 飛 語 で、 h 1:0 \_ U) 語が 悪な、 生乳れ て間に合つ 錦 私老 T 州为 はじ から 0) 七 ウ飛行機 心言 たの 0 鐵 8 奥教 路震 て飛行機に であ 0 機に乗らうとは思ひませ 奥にグ 天元 3 ~ 乗りまし 奉天から撫順 > 響 100 たか

3

を抱い 通信

4 ~

T T

鮮滿 夜遲 宅 東京

には絶や T

によっ

知

見送ると云ひだした。私も暫くでも行動を 句會まで見送ってくれることにな みつる君は名残りを惜しんで、 た。乾杯!乾杯! を排し、次いでダンス 揚げた。そして奉天一 よかつたのである。 帯ないない 柳路夫妻、 300 宿を發つことにした。 ば奉天!の日が來た。 旅行先あんなところに 石 此處で死ぬつもりもな 炭 何くれとなく、 二十一日 か みつる、 金 私たちに踊り か 私艺 0 水 撫 ガン 1 奉 一四人は振順終發列車で奉天まで引 順 私の身邊の ル 天 1. . 10 陽 御主人の許しを得て、 6. き よく二十一日の朝、 奉天會館の椅子に腰をおろし った。 狂ふ男女の姿態はどうでも から 生 から 去 落 採 る 3 世話を 柳路夫妻は大連まで 炭 ち 殘 所 3 h 緒にしたかつた P 4 てくれ 鞍当ん 私は奉

前八時三十五分奉天驛を離れた。

高元子さん、秋山しづか君等に見送られて私たち一行は午ばない。

寺圧洋行主の吉田さん、

小倉圓平さん

みつる君の勤務先、

奉天の朝の街は冷めたかつたが、人々の心は飽くまで暖

一般の間際になって圓平人形の店先を借り

-1.

記念撮影をし



7-0

職者・幹主耶路・子文高日・るつみ戸江・ 不聞倉小りよ右てつ向 てに預告屋形人日一廿月三 ・ 君諸のかづし山秋 ・ 代松騎岩 ・ 路柳

朝る去を天奉

h

で話がはづんだ。話題

0) 中心

は昨夜雑貨商を襲

うた匪賊射

0

匪賊襲來と知つ

5

脱岩

明、岩本善男君等に出迎えられ、 すぐ様その足で製鋼所を視せて 鞍だる で は昭和製鋼所の永井草

もら

もない 所の消長にあることは云うまで だっ 10 ぼろ氣ながら判るような氣がし 如い何か の終題 萬人 門外 全工場 鞍党 塩が、 漢の 働きかけ 從業員が活躍するさう 傷の作業期には、 の街の生命線が 満洲人八千人、 私達 世界の鉄鋼作業 · も膨大な三基 る 3 かが、 合計 日本なる

七八人の集まりだつた の堤水叫坊君はわざ は製鋼所の人々だ (前號鞍山句 1

豚栗中尾 ・鳴可木鉛 ・ 風路川谷長りよ右てつ向 ・ 送見の後會句迎 以 ・坊叫水堤・明草井永・幹主耶路・資柳崎智・代松崎智 影振日一十二月三 ・ 君諸の

てに驛山鞍

に時間 したが したる 軍人が句園し 出 賊さ になった。 ル した家族の の弾のあらん限り、 みつる君は作句が やうに談してゐた。 たんだと鈴木可鳴者が は各自兩手にしてゐたピ 馬賊の物騒な話で持ちきり かくじ れうて 態で私たちも立つた。 後に警官たち 0 都合で 0 者の報告で警官の たため、 ト足先に辟云 べすむ の射撃 観射し盡 二人の 次い 見って と同時 で匪 ス 來 1 匪

ここで匪賊射殺事件の號外を見た。

たっ

び街の

カフェーまで

引返

取造品

へてゐたの

で見送つて下さ

くだ

出で

見たら汽車の時間を

鞍山川柳家の 人達と共に

會々與悉脂)

その多く

午さ後

時世

から

天祐居で私の

句宴が

開かれた。

110

大石橋から参加した。

作句以外に、

支那料理の

0 圓流 早を 園門

馬賊には馬賊の 甲 II. 胡 義 0 死 h < 3

### 同日タベ鞍山發湯崗子着、 に入浴、同夜十一時二十六分で大連へ 對翠閣溫泉

薄暮湯崗子驛に着いた。鞍山から湯崗子までの所要時間は僅 汽車なども馬賊の襲來を避けるため、消燈して徐行したもの ゆく。『事變前には湯崗子あたりでも随分危險だつたので、 け内地の冬よりもに惨だ。五分十分とグンノー薄暗くなつて 云へば内地では櫻が錠びてゐる暖かさであるが、暮れゆく空 です」と柳路君から、そのころの話を聞かされてゐるうちに 鞍山を出た行車は夕陽を窓にうけて走つた。三月の下旬と

歩で行つた。驛を離れた道の兩側は痩た竹箒のような姿をし た樹がスクノー立つてゐるばかりだ。宿は驛からそんなに離な れてはあなかった。 温泉宿對零閣の老ボーターにトランクを渡して、宿まで徒れないないない。

代って松代さんが湯に出かけた。 ある。和室に入つて、すぐ柳路と二人で温泉に浸つた。入れ 對零閣は満鐵の經營だ。流石に堂々とした洋風の温泉宿でにないかく はない からい こうく

ビリヤードの部屋をのぞいたり、ホールで女中と泊っ客の大 湯上りの三人が女中をからかひながら一盞傾けた。

阪音頭をしばらく見てゐたが、それにも他いて、部屋で解轉きませた。 私たちは、その夜の十一時二十六分の大連行に間に合ふよ

て腰をおろすところを見つけた。私は窓際に頭をもたせて、 うにネクタイか結んだ。 夜汽車はかなりたてこんであた。お互は分れくしに辛うじょ

うつくいせうとしたところを、柳路君に起された。 / )と寝てゆくことは心苦しいので、私は大丈夫だからと云 交渉をしてくれたらしい。しかし、自分一人が寢臺で、のん つて断つたが、明日の大連句會があるからと云つてどうして 柳路君は私が疲れたらといふ心配からボーイに二等寝景の

意をうけて一等寢臺に移つた。 さかない。 實際、私は疲れもしてゐたので、たつてのすゝめにその好

二十二日午前七時大漢著、 出迎られナニワホテルに投宿、午後市中見物 **濤明、三福君等に** 

を、私は朝鮮から北浦へと逆コースをとつたために一番最後 に踏んだ。二十二日の朝の七時のことである。 大島滋明、佐々來三福、見玉凡稚三君の出迎えをうけた。 満洲の大玄関であり、隆々たる新興都市である大連の土地

階の三號室、柳路夫妻は隣室の五號室に入つた。 宿は商店街にあ 三福君の好意で、 ターで降りると 0 すぐ様ナニワホ 地下室が食堂になってゐた。 テルに投宿した。 x L は四 ヴ

1

1 あ もう家に歸つたようで、ちつとも旅にゐる氣持がしない。 は ドと同じものば なんてい ・な・き・ ふレ かり コードが鳴つてゐる。私のうちにある • か は 次ぎくに鳴らされる。なんだか 戀のさだめ か ~・あ 1 南 . あ · 8 .

修君の邸が火元の谷地頭町から程遠くないことを知られた。 からだっ ことを祈つた。 別としてすぐに打電した。そして原館川柳家の無事ならん の館大火の號外を手にして胸を刺された。青柳町の龜井晟はいている。 できる ではない はなが、この日満洲日報 私は斯うしたのんきな旅を續けてるたが、この日満洲日報 展修君等の身邊が氣づかはれたので、着く か着かぬ つてゐた

午後から、三昭君 の福昌公司の社員の案内で、市街見物を

作業だつた。 らつた。 い業だつた。経對縱覽謝絕を福昌公司の關係 内地で見られない圖は三泰油房の、身に一 によった。 給になる素ツ 0 あ ぶら 人の ば 25 B 3 3 關係で特に見せても to 総も郷はない裸婦

> 臨ん と稱ばれてゐる小崗子の露天市場、連鎖街などを見せてもら といふ句が出 つた。夜は満洲土建協會の樓上で開催された私の歡迎旬會に 句會は二十有五名、頗る真摯な集まりであつた。 たの句會前、地下室食堂で有志の歡迎宴が開かれた。 来た。その外露西亞町波止場、 俗に小盗兄市場

を結んだ。 そして川柳の人情味は各派を超越することを総叫して私の談論を内容として語つた。例を列席せる岩崎夫妻に藉りた。 られた 食食製金原)三幅君の紹介によって起つた私は、濤明君から與へ 『満洲と川柳』の題下に約五十分、満洲と川柳の人間

散會後、佐々木三福、井上鱗二、川村宗嗣三君と柳路と私の光榮とする所であり、及ひそかに感謝するところであつた。 五人がバー、 席上終始水を打つたるが如く清聴を煩はし得たことは私の

川柳以外に満洲知識の多くを教示されたことを感識人がバー、吉永に歡談を交へた。 してゐ

ライヴゥ と三人で旅順に遊んだ。流石に満鐵王國の手で完成されたド 翌二十三日は朝の x 1 あ つて坦々低の如しである。途中星ヶ浦の うちに所用をすまし、午後から柳



島大・幹主耶路・路柳龍岩・代松崎岩・ずわか武宮りよ右てつ向列前・會句迎歌幹主耶路 明明養養・発指消費・山流木富・明東川中・伊一村竹 りょ右列中・編三六々佐・明藤 別後・月淀富藤・美温松平・子任東木高・雅凡玉兄・慶原井澗・枝玉藤後・美麗比本松 ・ 君誌の九南村田・か得翰森・原榮史土・嗣宗村川・碧三瀬書・陀珠励瀬りニ右 影撮てに上楼會協建士洲滿場會日二十二月三

1

1

7

0

如言

き真に博物館の名には

#### 夕の連大

「類冠山北砲壘」

\*

觀なた。

旅順開城に 地中戦を演

0 C

ス

テ 6. ייי à

た水師

営"

100

行

0

10 1, て乃木、

出で

關東廳博物館を觀た。

第

師属だ

0

決死隊が

て古領

٤

美妓火 たが既 1. 研究 行には時間 10 なんだか 夕前 亞から發動 更 兩將軍が、 柳? × 8 0 満鐵理事ない 路君 唐時代 旅順 多くの資料が 1 0 清明君 がある。 役所の ٤ の新市街 0 餘裕がな か會見し 3 から 0 古器物や、 來記 緒と 0 から 86 出で 1-1= 宿里

か 3

V n

T

,

湖川に招か

n

辭じ

お待ちしてゐるからとのこと

一流の名にはおない。 どの遊ぶとこだと聞いてゐただけに よ うな感じ お供することにした。 のする箆棒に大 入きな旗亭だ

喧嚣 産業ができる。 ば IJ n + T ように、 正視出來な 一式が は 戰 利品 陳為 ひんまげられてゐるなど當時の強いのなどはいます。 記念館 8 のがあ を観さ To 30 日露戰爭當時 板光 0 0 一芸に 兩軍人 0

して觀た。

私を

をそばだて

U

めたが、飛脚旅

4.

佛像

風力

俗音

資料や、

中央亞

0 眼 て、

館内を走るよう

じくダンスホールカイラクに趣く。三幅君は女を擁して巧に 興濫さて、ダンスホールペロケに、ペロケを辟して、おな

日は柳路夫妻にも別れる日だ。 旅桿通りに行けば明日は大連に別れる日だ。大連に別れる

『いよく明日はお別れだネ』 『なんだか別れたくないですえ。是非隣らねばならないので

もある」 京しなければならないし、これだけ皆守をすれば俗務の山積 をかけるのは心苦しい。それに歸れば、すぐきやりの會で上 『是非といふ譯ではないが、いつまでもゐて、みんなに迷惑

のことはうにでもなる。 あると云ひ條、これから先は海があるばかりだ。歸つてから た。この次はいつ會へるか判らないと思うと、いかに行経が で私たちのために一下船だけのばしていただきませんかり 『それはさうでせうが、いつ又會へるか、それも判らないの 一人は口を酸くしてすすめてくれた。私も思ひは同じだつ

> 要するところにある。景色は内地式で漁火點々として詩情頻等 りに湧くところだ。 ここは星ヶ浦の反動側で、大連の街から自動車で二十分を

見た。映畵そのものは大したことはないが、のびノーと映畵 私等の家は海へごり込みさうな尖端にあつた。ここまで來て を見るような時間が與へられたことは愉快だった。 ようと云って、街へ出た。中央館で松竹映画『愛の出船』を はじめて柳路君としみじみとした話をした。夜は活動でも見 千勝館は別個の家が庭内のここかしこに散在させてある。

持つて働いてゐる女給を見た。私にはどうしたことか子のあ となどが胸に來て、酒が理に落ちてしまう。 るなしがすぐに割った。その女のこと、その女の子どものこ そこを出て三人でミス・ダイレンへ行つた。そこでは子を 32

だけ寄って見ませう、と魔人揃ひを賣物にしてゐるカフエー・ ワカナの二階へ押し上つた。 私は『もう歸らう』と云ひ出したが、松代さんがもう一軒

うと云つて松代さんが、千代鶴といふ女を大連から招んでく れた。十七だと云つてゐたが色氣なしの妓だ。 の島も眞ツ白だ。朝から酒にする。對手がなくて淋しいだら 翌世五日は雪が降つてゐる。私たちの家が真り白だ。向う

灘の千勝館へ移つた。

ニワホテルを引揚げて、鱗二君に聞いてゐた海の香高い老成

『ではさういふことにせうかなア』と廿四日の正午ごろ、ナ

それ 代鶴。 掘り炬燵にあたつて、 家は大阪の住吉だと云つてゐた。私の家から七八町しかない。 一階まであがつて見ただけで出た。旅なればそである。 商店街 夜が來た。 名をすて、十七八の戀もせむといふ氣にもなれない。 と見 it 同じ自動車で歸らした。 ワ て歩いた。満州人が經營してゐる錢湯ものぞいた。 へ出て、支那緞子屋や、 ナへ寄った。昨夜の魔人たちに會った。すつかり 三人で街へ買か物に出かけることになった。 チ ピチピ吞ん 寶石屋や本屋や、 それ

から

干多

君の顔が く黒點、 私は高く帽子を振つた。柳路天妻の顔、三福君の顔、 大連波止場はテー 朝智 消えた。 甲 わたしひとり内地の春 誰れし その他の人々の顔、顔、 -時のうすりい丸に出船を報らす銅羅 板 0 も感傷的にならざるを得ないではないか。 風 1 プの波、糖て一ト筋の煙を残して消えゆ 大 連 ょ 顔が見送りの顔、顔、 歸 6 Z 3 船る が鳴な つた。 濤り



ラ

ス

を傾けた。

惚れられず惚れずに歸

3 す

虎

ナニ

**H**.

+

を

過

ž

老 老

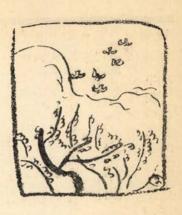
虎

雅雅

馴染になった。

もう今夜が最後だと、すゝめられるまゝにグ

千勝館に歸つたのは十二時ごろだつた。



# 一篇研

秋 稟 0

屋

省

蛭

ふ意であらう。 掟 かい 有 7 同

島田に結つてゐるとだけかと思ふ。 例へば妙は妙の一定の髪を結つてるで。皆一様に高島田なら高 で命を助けられ、其代りに黑髪を截るるといふ句だと稽へる。 義が發覺して、兩人とも掟に由つて成敗すべき處を、主人の情 秋の屋= 意餘つて辭足らずともいふべき句である。男女の不 魚=さう複雑には解さなかつた。單に、きまりがあつて

だのであつた。 重く解してゐた。故に「御手討の夫婦なりしを更衣」が頭に浮む 省ニー前句に依て判明するであらうが、私は「掟」の一字を

### 隣の顔 4 飽 るくす IJ

自分の直隣に肩を並べて、湯に浸つてゐる人も、自分と同じく 秋の屋=日々薬湯に入浴するけれども、病氣は少しも癒らぬ

# 30) 葉つゝきたなひれすに散る

も柳の本性だらう。汚なびれないところに悟人がある様な氣も 秋の屋=俳諧に「一葉散る」といふ題があるから、 ニ=「氣がすすむ日はひとり散る柳かな」篤羽)。 此句は梧桐 散るの

の差はある。 あるが、降るやうに落ち散る様を云つたのであらう。多少趣き あらうが、此句の似は、柳の細い葉がホロくくと一葉づつでは にも動くと思ふ。 東 魚= 梧桐の方は思出した様に、ゴソリと一葉宛落ちるで

# 似ぬ顔を産んて我か身もうたかわれ

秋の屋=疑を抱く方にも理窟はある。 省ニートビがタカを産むといふ事もある。

魚=「我が身もうたがわれ」は、巳自身でも變に思ふと云

-( 34 )-

入浴に飽きたやうな顔をしてゐる、 魚=隣の顔も、 矢張り毎日、落合ふ顔なのであらう。 と云ふのである。

のはいつも同じ顔なのだ。 二=薬湯は連日入浴せねば効果がないのだから、出逢ふ

## 34 はね 馬に迯込 負 の久し s ŋ

込むだらば、それは無沙汰をした人の住居で、久しぶりに對面状の屋=路傍などで馬の刎ねたのに驚いて、其近所の家に迯 したといふのである。

之も前句の趣によつて、この偶然が面白く響いてぐるのであら 魚=かうした拵へたやうな偶然な場合もないとは云へぬ

事柄だ。 省二 東京など轉居趣味の多い人々の間には、 確かにある

### (35) 札配り遠くも 來 ぬ る 角 田 111

つたのだ。 の札配りがくる。「遠くも來ぬる角田川」は、伊勢物語の文に據 秋の屋=現代に於ても、 出雲大社だの高野山だのとて、色々

像すると、句法と相俟つて仄かな可笑味がある。 魚=しかつめらしい、然かも餘りさえない札 配の姿を想

事もあらう。 省ニー札配も不圖した事から、遠くに來たものだと感かる

### (36) 日 向 7 灸 を す 3 四 阿

一里の炙でも据るのであらう。 秋の屋=隠居のやうな閑人が、 日向に出て背を炙りながら、

魚=魔かな風もない静かな光景。

存するならむ。 ニ= 拙宅の老人は縁側で。 ― 一此句は四阿であつて興が

### (37)あふな 理 0 屆 < 原

い。殊に吉原からの要求とあつては。 秋の屋=遊女の無心を斷りきれす、 ニ= 義理を果すには、 あぶない無理算段もせねばなるま

危くも義理を果したが、其後の事が思ひやられる。 主人の金をごまかして、

魚=「あぶない義理」は、諧謔的で面白い。

# (38)富士を見て田植の髪をゆ り直

るの 秋の屋=富士山と富士額と、相對したる所に聊か興味を覺え 二 水に寫る我が姿を思ふところ一興。

魚= 少しく作意が目立ちすぎる。

東

# (39) 更るほと氣の若くなるとし忘

むで若くなるもよからむ。 省二=醉ふては前後を忘れ、年を忘れる。お老人サバをよ

六十の筵破りと俗語はあるが。 秋の屋=不良老年の飲むだくれ、 青少年よりも世間體が悪い

そ年忘か。(但年忘の意義は其一年中の苦を忘れるための催し である。 魚=夜も更る酒も廻はる、 段々氣が若くなる。それでこ

### (40) 辛子 か 利 7 時 過 た

なのだから、「時過た聲」は含蓄無量。 秋の屋=目から涙をぼろ~~零す狀が想像される。併し初鰹 省二=舞臺から飛むでも食はねばならぬ初鰹、 それ程眞劍

-( 35

よからう。 で初鰹と解しても宜しからうが、句面丈けでは限定しなくても ない程利いたのだ。「時過た聲」は巧い表限である。前句の模様 魚=暫してホウ利いたといふ場合、早速には聲も出し得

# 物くさひ瞽女に引るる糸さくら

ても物足りないのは當然」。その瞽女、糸櫻を引張つてみる。そ ニ=概して瞽女などは物臭ひものだ。(よし美人であつ (詩の上にも)の動くものがあらう。

で製作したるが上品とし、欄を下品としたが、櫻で製作したも した、下等の三味線ではないかと思ふ。三味線は花櫚、紫檀等 秋の屋=糸櫻といふのは花の事であらう敷。私は櫻村で製作

ないでもよいとの意味か。或は「糸ざくら」といふ地唄でもあつ 手さぐりに引き寄せこれで、もう花は味ひ得た。何處を立歩か のが有つたかを知らぬ。 説の方がよいやうだ。ケイ十七に「しだれ櫻を引いてみる瞽女」 て、それを彈くといふのか、どうも判然しない。(再記 魚=花見仲間に連れられた瞽女が、體にふれた枝垂櫻を 私の前

秋の屋=前説に賛成する。

# 鹿聞の淋しい 足 をう

つけ處。「聞馴て聞ぬも淋し鹿の聲(ムナ六) る主哉」、【太無。「足をうち違」ふも寂しさの、デーケートな見 ニー 鹿聞は淋しいものとなつて居る。「鹿聞の顔淋しが

秋の屋=「足を打違」とは、胡座をかく事であらう。亦、立膝

をしてそれを打違へるとも聞える。何れにしても淋しい風情で

をうち違へる」處に、淋しい氣分をよく出し得て居る。 魚=腰掛けてゐる足を打違へてゐるやうに思はれる。「足

## (43)犬死の側で妾に 成 りあ 3 世

やうに成つたのである。 大死となり、卑賤の女が愛妾に抱へられ、御部屋様と呼ばれる 秋の屋=主を三度諫めても容れられず、遂に腹を切つたのが

東魚=復雑な事をよく云ひ得たものだと感心する。

省ニー全くだ敬服する。句の姿も素直である。

### 鳥 屋 0 前 7 お IJ 遠 乘

目に留まり、馬より下りて價を問ふのであらう。 秋の屋=遠乘に出た武士が、その途中の鳥屋に珍鳥の有るが (44)

魚=魔かな春の日が想像される。

省ニー遠乘連中が下りてくる處を想像すると興がわく。

### (45)榊 來 て 給 0 Ш は 低 <

鱠の山は御馳走。 ニー「急な事屛風と榊すりちがひ」など、如く、祭禮の榊

である。 いて酒宴を開き、而て神輿、山車、黎物の渡るのを見物したの は、店頭に金屛風などを立てゝ、緋毛氈を敷き、親戚知人を招 秋の屋=山王、神田兩社をはじめとして、江戸時代の大祭に

る、祭らしい心持ちが出てゐるが、「榊來て」と云ふ口調が少々 東、魚=神輿がくる時分には、もう既にかなり酒が廻つてゐ

### (46) 切 る 枚 方 0 錢

にてもありしか、知らず。 ニーヒラカタは淀川舟の寄航地。 枚方に錢を投げる風習

秋の屋=鏡を投げる風習は無いと思ふ。 その代料の錢を投げるのではない」。 食はんか舟の物を買

る様を、 が嬉遊笑覧にもみえるから、恐らく短時間にせわしい賣買をす 魚=舟が着くと忽ち奈良漬などを賣りにくる、 かう詠んだのだらう。 と云ふ事

### (47)東路は 仕 廻 仕 塞 12 風 0 神

る 始めて、 秋の屋 = 現代の所謂インフルエンザで、長崎地方より流行し 京阪地方に及び、最後に闘東に傳播するといふのであ

でしまつた後ですると云ふ意ではなからうか。 魚= 二 | 風邪患説ではなきか。 風の神送り」を豊事の仕舞仕事、 取入なども皆すん

### 48) 拾着て 新 地 は寒 (1 赤 蜻

されず、袷一枚では肌寒い頃、 で、新開地の光景がよく表現されて居ると思ふ。 秋の屋=新地とは海岸などの埋立地で、まだ家屋も多く建築 赤蜻蛉が空を群飛するといふの

う。 魚=赤蜻蛉を描出した點、 恐らく作者の實感からであら

障子菜の上で張る」(武三)なども、よろしからう。 ニ=新開地と赤蜻蛉は、 確かに氣分が出て居る。「新地の

### (49) 婆々 か 死 6 7 中 垣 か 2 礼

鬼角憎れ役<sup>°</sup> = 中垣 は隔 T 0 垣。 夫婦中にた てられたも 婆さん

死んだ故に相方和睦する、 の老婆が居た爲に、是迄は隣同士で仲が悪かつたのが、 秋の屋=夫婦中の隔てが取れたといふ意にも聞えるが、 といふのではない敗。 頑固

魚= 平凡に夫婦仲と解してよさそうに思はれる。

# (50) 節句前文も五尺のあやめ 咖

十日過同様、その文の長つたらしい必要はあらう。 二 五尺のあやめ草は成語。節句前なのだから 例

東魚=脛い洒落である。 魚=輕い洒落である。 やはり遊女の無心文である。

### (51 あふひの上の 袖 12 躨 摩 0 香

更に動かず、云々」と有るところである。 の數を盡してせさせ給へれど、例のしうねき御もののけひとつ 秋の屋=源氏物語の葵の卷で、その本文に「いとどしき御祈

東 魚=臈たけた中に神秘的な凄しさがある。

二=古川柳では多くが葵の卷名からの取材句である。

# (52)身のうちに帶かふへると芥 111

ては、不義をした男女は安堵してゐられず、手に手をとつて逃 秋の晨 平素締る帶の外に、腹に岩田帶を締めるやうに成つ 亡するのである。

二 確かに手腕であるが、帶がふへるとは、 考へ落ち氣 魚=「芥川」を駈落の意味に活用した點が面白い。

味な表現 ではあ 30

## 0 S 0 滕 を t 7

が、「膝をたて」に表はれて居る。 ニー入相は氣分が一寸落ち かぬ、 いらくする淋しさ

秋の屋=此二つののの字に、少し難 から である。

に對してゐる氣分に解する。 原本は「入相に」である。誤子か誤植であらう。

### (54)田 かい か < 成 2 冬

ある。 豆腐と冬籠なら古俳句に詠まれて居る。 秋の屋= ニー食べ物の田樂ですか。それで「みちかく成」とは。 田樂の竹串が短くなると云ふの敷。 句 意が不明 瞭で

魚 原本どうも田樂ではなささうに思ふ。 再考。

# かんこ 戸の暑 さはし ぬ 也

市の暑熱は知るまい。 秋の屋 魚=都の暑熱に耐へ兼ねて、 11 鬱蒼たる森林地帶に棲む閑子鳥は、紅塵萬丈の江戸 凉しい地を思ひ、 閑古 島の

生涯を美しがつた心持ちか。 ニ=武蔵野は寒暑とも、 た私であるが。 案外酷しいと思ふ。臺灣朝鮮 4:

# 揃 111 0

東角=なんとも解を得られない。
秋の屋=「桶川の君」未考。中仙道桶川宿の飯盛女をいふ敷。

ニー金砂子上に「附本にむせる桶川の君 角 萬 屋 て折 礼 る

妻

字の形と角萬字なる妓樓とに、 節内でみる稻 折れる稻妻は技巧)。 全く別趣なもの であらう。 (萬

町の角に此店が有つたものであらう。 秋の屋=「角萬字屋」は、江戸町一丁目の萬字屋佐介で、 大方

魚=稲妻に卍をかけた丈けが山なのであらう。

家名をつける五丁町」で中萬字などあり。 ニ=細見を見て下さい。角萬字はありましたえ。

秋の屋=角萬字といふ妓樓ありたり。 (58)

## 出代の門四五 間 はかけ 7 行

寝顔に暇乞」。— 下女でそうだから、乳母であつたなら一層だ。「出代の乳母は 省ニー住み仕へた家を出代るのは情の迫まるものがあらう 四五間かけて離れ、振返えつて眼に淚。

東 魚= 今時かう云ふ人情味のある奉公人は秋の屋= 女子の心理が能く表現されてゐる。 魚=今時かう云ふ人情味のある奉公人は一 寸得難

# (59) しから れた日 0 分てタく

もすると、 ず、夕暮は寂しさを感ずるのに、 秋の屋=山出しの下婢などが、まだ主家の風習にもよく馴れ 一層里心が出る。 何か過失をして、叱責されで

思ふ。 東 魚 日の浅い新妻などの、 1 ほらしい氣分にもとれると

= 雇人の場合であって、分て」に刺戟が強い。

# (60)宵 ま

省ニー前句なくしては働かぬ。 
虚が効果百パーセントに得顔に闇の宵を、 である。 秋の屋= 魚 ロバーセントに得顔に闇の宵を、かゞやいてある。青闇だけに、行燈より外に全く頼る明りがない。 平易のやうな句であつて、 何とも解釋に苦しむ難 行

嫁毒 官 子 背傘群み 雜 Ш \$ 界 を集な ち -贳 巾 零 3 か 游 抱 心 金 0 T 泳 3 ろ理 T < 3 術 3 げ 葱 す 美 多 危 1: T 野 父 T 也 3 聲 溫 0 0 15 2 とほか 1= た 5 道 に 4. 111: を は ねほ 2 雨 す ti な を 風 10 b ば から 帶 4. 10 か 0 降 0 b 3 2 V 女 あ あ す せ 化 西 ば T b T 0 灰 3 瘦 ぎゆ 肥 げ 働 T 石 田 料 を T せてゐる あたり ナニ V 見 3 四 1= 3 T b る五 ね b 3

樂

伊

豆 大

島

1=

7

春

元

紀

太



水

谷

鮎

美

路

郎

選

養 聖 3 う 出 學 + 凡 藤 天は 子 か 戾 校 七 人 0 を 3 b 子 八 棚 から 0 ば n 0 替 あ ٤ 旗 大 證 哭 事 旅 春 \$ 據 T E 0 U 0 T 12 2 女か ٤ à 四 H -事 5 笑 b 0 + 本の 82 3 出 -肌座 0 夜 を 3 生 U Ø 0 笑 か 蔭 厚 1 b 田 ٤ 女 2 6 艺 化 9 2 に -慌 よ 翠 粧 幟 U れう H T

夢

日 風 怪 消 2 惚 夢 死 盃 ٤ n 知 曜 景 人 防 は 0 b 7= 0 ٤ 日 ٤ 旅 ょ 伊 0 京 東 T 伊 勢参宮、車中にて) 豆大島にて 隣 速 噂 都 デ 京 焰 かゝ は 步 原 h 0 0 手 山 5 7 7 度 を × 0 0 G G 0 1= 前 0 1= 爪 3 P 0 都 7 5 から 0 n 0 恣 宿 な 士: U T 灯 0 3 派 2 福 4 絽 8 8 住 御 10 0 h 對 足 0 身 有 T H は 0 有 田 智 は な 3 來 0 山 な 0 難 組 か b 神 亂 3 丽 3 \$ 艷 n 火 宿 樓 耽

挨

拶

\$

0

0

溫

泉

塲

褌 海

下

田

港

13

泣

3

82

n

ナニ

容

で

落

5

た

紅

桥

仲 病・ひ 廣 失 雨 逢 流 曳 禁 親 借 君 テ 旅 業 人 ま 直 い 0 h 行 かっ 酒 1: b ひ 1 す な 3 空 音 0 # を n 禁 V 12 ٤ プ n 70 人 打 女 聞 で 追 T 煙 から 來 3 切 悼綠雨兄令閨 h 上 房 T T 60 0 3 < 金 顏 た る 0 知 4. ば T 12 遠 n 12 T から 卓 T 人 0 10 ば 33 ٤ h 打 2 貯 黑 上 音 L 4 誰 不 3 7: 織 を 2 電 5 ば 3 笑 0 苔 n 走 を 幸 を 話 な L 來 ٤ ば 屋 T 山 脫 5 賞 椅 1. 太 は な 安 J: す 神 稼 思 仕 \$2 8 子 加 平 から は 父 馬 3 來 H 0 菜 à T から 洋 舞 3 藤 重 田 0 鹿げやう な な ٤ T n 葉 吳 T 邪 風 0 b n 死 v h . b 來 T 3 後 服 n る 魔 呂 浪 T 秋 水 醉

は 衝 4. 賞 圖 電 な 書 から 金 柱 0 立 1-から É ち 館 0 3 書 ٤ 6. 0 月 カ < 鞘 0 3 8 姉 すり 3 1 は 當 1= 歷 露 F \$ B T 地 史 に 机 5 脊 0 作 を 0 中 寢 深 家 黑 0 隅 合 3 ~ 名 4. 3 を お V 例 to 啦 せ もうとき ٤ を 貸 1= 茶 5 4. U る 4 め 店 ひ

お

ラ 5 死 1= 僞 ょ ブ b 10 刑 3 1b 事 な < 病 B 0 ٤ は 5 1 6. 床 春 ほ な ほ 3 5 を 6. 1 5 死 から 1= n h 櫻 女 刑 7 から から U 事 3 10 ち 惚 から U < h n T 恐 居 ま 3 2 す な 3 櫻 h 3 ね

石

森

靜

太

あ 女 切

4.

盛 あ け T pq 5 あ る 3 部 合同川 大 n I. T 柳大會 3 台 2 貪 乏 から 住 む 鲍 層

房 1= 3 符 嬢 會 0 5 0 買 3 10 5 B 短 2 \$ 幹 な から 氣 養 目 事 子 永 年 今 高 は 嘆 齡 夜 賴 1= 座 戀 よ は 3 は 母 から b ょ ひ Ł 早 あ せ 3 ٤ C 4 3 吉 來 E 團 b 3 から 田 るら U 子 酌 5 な 1 品 む か U

夜 自 金 3 櫻 動 屏 h 電 風 L E 話 手 cz 里 長 + 切 持 3 h 九 ち n 田 しや 居 L 無 斡 かたの 移 ま 沙 鄭 彦 汰 南 10 る な たり 待 3 2 がさびし 别 1-5 3 n Ti n か 水 な 3 h 20

雨總務令閨の 3 か T E 計 T お 凉 4 L 3 青 な b 柳

看

謎 0 粉 3

婦 U

10 か

人 10 V

主

義 \$ げ 3

を 0 L 夢

聞 子

3

n

花

嶽

な 線

尼 かっ 2 纞 お

絲

之 3

助

聖 道

書

な

りにけ

h 3

白 盜

を を

0

T T

は る

5

٤

な

居

所

を

變

ば

し

を

-

3

n

3

吟

紅

熊

車

大 ま 葉 お 踏 -F 花 頑 O 借 づ 牡 1 き 枚 張 積 0 0 2 b 丹 ば 留 n 0 0 b L 1 電 n 3. 8 な た あ 守 から h チ は 見 ッ 傭 4 3 せ 3 2 1-話 怒 0 芝 我 プ n は か 來 希 男 \$ 鳴 8 から 浮 n す ば 3 望 0 3 3 ٤ 生 氣 ス 0 15 圓 男 頃 思 仔 智 IJ 身 元 B 我 方 1 0 2 10 か יי を 0 11 家 から U 娘 愛 す 村 パ 思 道 は 0 言 瓣 T 力多 嫁 灯。 から 2 兒 8 田 2 から L な 多 から 脫 負 あ ナニ 新 ま 出 ま た Vi 乘 40 暗 V 市 U T 3 b b 3 U 3 せ 4. 3

街

右 高 足 8 冷 春 あ 着 b 5 F P 0 は 世 12 滿 駄 Da か 雨 た か 家 開 To な 格 5 V 傘、 福 田山 7 み 來 8 子 L T 左 せ 1: h 0 0 4. 吳 櫻氏來高ゼ な 5 12 大 1= 開 驛 n に 默 阪 3 筍 待 1. 荒 埠 0 は T 0 合 7= T カ 頭 \$ 物、 宝 音 膳 皮 明 に 首 な 急 灩 力 L に を から 0 藤 石 ラ 3 服 停 む 椅 0 す D 力 もの 脫 竹 柳

子

1

3

次

僕 6. 0 0 鯉 は 73 春 ょ b 0 物 0 T 姿 女 か 5 ٤ 手 1 智 T 5 あ 美 げ L 3 <

8 T. ば 終雨氏令閨の か b 泣 死を悼む か せ T 4 n 台

せ

す

大

鶴

喜

由

湿

醉 朗 幽

0

1

智 水

> T 妓

か

らか

は

n

橋

絲 後

雨 H

氏 0 妻

1

來

3

者

から

何

處

12

在 中

3

は

在

b

澤

潤

水

飅

0

目

1=

朝

2 か

多

育

鉢 泣

か T

3

せ

7= バ

舞 1

0

笑

割

T

6

٤

活

字

0

金

を

讀

3

ひ

3

0 1

月 +

IJ

7 ギ

" B

11 1

+ 若

" 3

11 命

0 0

歌となる 夢に鳴る

3

ワ

-( 42 )-

3

楓

車

忠 女 徂. 人 3 告 神 格 者 す 0 春 を 憑 3 如 か ょ 1 他 n あ 稱 殺 1= 4. 元 自 5 殺 如 0 8 n 4 は 3 b 戀 4 か 日 處 に 0 すっ 落 女 危 碧 ち 73 機 n

植 Щ

九

天

吞

舟

君

病

快

方

5 す 步 1 " 行 b 2 0 銮 母 1 櫻 け 0 y + ち ワ 1. 6 七 1 回 四 U 忠 Ŧī. T す 天 人 拔いて戻るなり 1 氣 b 晴 落 朗 5

明 珠

西

村

か " 氣 b 見 v " 3 舞 長男自動車にはれられ資傷 秘 會 ٤ 術 社 才 2 0 A P 事 v " 5 を 10 3 母 字 3 ٤ を す 來てるなり な な 5 77 h

4 n 1 3 6. ٤ 本 を 出

惜

零

0

夜

女

3

对

イ

ス

持

0

か

6

4

h

2

知

0

T

眞

颶

カ

病

お

善

か

げ

は

肥

C,

n

た

I

٤

ば

かりなり

業 想 12 E お 女 ば か b から 梶 入 谷 0 T 巷 來 \_

空

片 豆 親 0 葉 0 糊 1= を 子 守 忘 n 0 ナニ 國 洗 は 遠 2

10

所

物

Ш 陰川

服 3 0 ち 柳大會へ山雨樓氏を迎へて b ٤ Ш 陰 日 は 野 青 10 華 空

元 廣 局 3 30 今 は 止 出 日 寧 T 福 め 主 來 51 3 T 百 0 力 制 種 立 女 +: 0 は 0 背 首 ナニ 渡 本 釘 E を を 邊 買 見 振 0 曉 鑄 71 せ 1

結

51

家 背

敵 戀 驚 聖 から 0 愛 な 女 す 5 3 0 た 心 顏 を 1 酒 0 女 から ま 5 し 6 ち T 4 T か n 居 7: 3

ワ 退 ル 1. T " か 4 n 5 7 土 ガ 地 は 4 0 兎 愛 に 慾 角 毛 俺 秘 利 話 0 となり 5 九 0 波

面 目 奥 な 野 額 0 禿 皺 Ш

童

水

性 職 退 -發 六 逢 デ 巡 鮮 病 業 0 奮 屈 1 感 人 查 re 0 re 5 \$ 3 1 0 T 0 1: 氣 ま に せ 1 云 8 3 \$ す 働 ち 1= 2 0 5 弱 今 \_ 彼 3 制 2 自 ば す 點 番 日 女 戀 服 氣 殺 小 0 から 5 借 に ٤ 言 彼 着 あ か 若 0 v 家 知 ٤ b 女 物 春 毒: 6 を 平 は 7: な 市 は 撰 北 かゝ 者 な 5 \$ お 3 3 塲 JII 斷 82 井 つと 3 るすです から 日 な 5 び から 沒 あ h 着 本 春 b

食

子

2

5

b

拂

à

晋

^

集

金

寄

せ

春季大掃除の頃出張

b

3 P

美

Ŧī. 新

月

5 0

5 豫

世 定

話

人

0

手

1=

あ

T 語

婚

Ŧī. ま よ 湖 7: < 家 は 釣 \$ n 今 五月八日富士五湖ためぐりて 無 3 春 4 沼 から 子 1= 見 元 父 0 7-安 b 家 かっ 近 6 四 す

よ

を

U

機 ٤

見

女

n

光

3

蓮 自 ょ

給 尊 0

から 心 ほ

慕 2 E

3 な

n 嘘 U

な き

惱 平 b 平

み

T

す b

h に

To

氣

な

む

3

0

8

家へ呼び

生 E 終雨氏夫人を悼みて ٤ 3 出 3 3 L 7= ょ た ŧ わ 巾 櫻 ば 3 着 0 か 花 寫 輕 b 竹 0 內 多 1 春

5 第

b

5

T

ち

よ

か 臺

た話なり

憶 10

15 n

盤

を

前 積

10 0 泣

L

戀

b

5 T

3

\$

お 0

か

L

5 追 3

-

n

な

b け

生

0

宵

春

風

8

4.

T

1-

ょ

所

0

窓

絲

雨氏夫人逝く

责

任

額

1=

青

春

を

飅

减

石 b

曾

根 3

民

郎

3 0 b 戾 大 西 T 八 來 步

3 井 け 扇 す 子

冬 呼

n 3 3 3 趣 瞳 味 10 8 男 悲 あ 江 せ 戶 U b \$ 3 出 n U 0 3

借 2

金

を

志

n

T

司 肥 着 b T 親 拾 孝 圓 行 札 12 を 3 n 振 T b る 硘 U 3

眞

田

幸

捐

白 厚 酒

2.

息

\_

人

宿

屋

0

洗

面

器

初

荒 井 英 賀 夫

藤 青 兒

後

から 藤 旋 b す 塲 勇

> お b 公

から な

待

5 親

E 爺

0

た

٤

下 い

E 12

抱 歸

0 b

E

-

3

re

知

3

子

澤

山 3 か

6

い

٤ か

华

0

せ

3 向

n

华川

1=

目

玉

\$

70

3

な

0

T

凱

近

弟

凱 銳

旋

す

旒

0

空

母

から

火

打

0

音

から

す

3

特 辛

價

品

٤ 15 1.

1=

か

1

女

裹

大

阪

は

醫

學

博

士

0

轉

· 家 此

> 賃 0

吳 頃

n は

ナニ

3 0

拂 小

2 言

きる

す 言

よと借りら

n

=

階

借

風

酒

\$

^

T

來

た

3 か

> 今 思

日

社

1

3

3

0

あ

0

た

0

音 n

2

0

い

銀

婚

を

羡

\$

の出

な

麥

Ŧī.

4

富

±

裾

野

0

東

京

見 0

物

12

4 鏥

溫

泉

塲

2

0

小

唄 倉

で 富

驛

來

姬 麥

田

御 奢 考 妻 遠 は 丽 24 뭆 0 0 1= まる U T 高 慕 お 野 ほ 前 塲 0 1 は 1 0 お 水

ょ 高 3 隣 b 0 壁 宫 な 岡 h 白

粒 K

あ 呂 屋 h 0 な 煤 男 御 へ 影 から 疳 長 人 8 临 殺 立 柳 T し

秀

戀 閑 高 は きる 0 4 冷 西 る ^ 人 3 1= 酒 慕 か 0 向き

聲 h b 零 を 味

鞍 馬

士

野

# なし

品 111 陣 居

機性は排除せらるべきであると思ふ。從つて する 最早吾々の意識の世界からさうした反 的イデオロギーな癌とするものであると信 かく何か根底的に反撥するものが あつたこ 弑虐性が根を張つて來たのではないか。とに り、さてこそ東京人自ら東京なくさしてみる それが逆に東京人に反射して 自己嫌恶に陷 累を及ぼして、とにかく東京人を観る大阪人 觀察ではあるが、夫れは在來東京乃至江戸と 民地的であるからと いふのも一應は尤もな とは事質であらう。しかし私はそれは小市民 の眼に一九式人物として 寫るのではないか いふものが一種傀儡的に取扱はれて、殊に所 ゐる 京都、大阪が歴史的に古く、東京が殖 に言ふといふやうな變態的考察が 跳梁して 好きになり、果てはふるさと東京か悪しざま 京人が東京人であり乍ら 東京かくさす理 戸人に對する反感が、現在の東京人にまで 「贅六」といふ卑稱で大阪人を呼んでゐた 來、東京人が大阪に住んでみて、 大阪が

> とかいふけじめた取り退くべきである。 はやはり大阪でも愚昧であるべきである。少 た時代は過去の愚昧でしかない。東京の愚昧 もつてゐた反感は最早解消さるべきであ 由もなく、大阪人が東京人に對して歴史的 くとも吾々川柳人は今日以後東京とか と思ふ。お互にお互の中から暗中模索してゐ 大阪

らの嫌悪する大阪な 讃美しなければならな 的殺伐の故に嫌つた或る東京は、大阪人自 か、それは全く前述の東京人の東京嫌悪以上 観てゐる。 京に関心をもつ、その價 うである。近代の大阪の青年は事實に於て東 人の大阪嫌悪の根は 大きくなりつゝあるや いからである。しかしながら事實に於て大阪 危險この上もない、何故ならば東京な殖民地 て東京に關心を持つたとしたら ごうである 進歩した近代大阪人の一人が 大阪を嫌つ 以上に「東京」を

借用してみる。一 太郎氏の「大阪をおもふ」なる一文から少し かうした一例として大阪人である 武田麟

> といふと、ちょつと奇妙に聞えるかも知れな しかし、それは直接的な 關係乃至關心がな かのやうに振舞はれてゐると思はれてゐる 政治的、文化的權威や權力も何ものでもない きるのとはちがふのである」 れこそ心底から莫迦にし 輕蔑することがで てゐて、その中味をよく知つてゐるので、こ はない。東京人は日常にそれら權威と接觸し いのにすぎなく、腹から莫迦にしてゐるので 、そこでは黄白絶對信條が横行してゐて、 大阪人が事大主義的なこへを持つてゐる

しておく。 漁失の利を占めるものでないことを 人の言葉である 上、陣 がこゝに引照して 氏の言葉で カソは吐かぬ人だと信用出來る に東京文壇の新鋭として活躍してゐる 武田 とも思ふが、一大阪人の言葉である以 かう直戴に云つて了ふことは ごうか

それはそれとして武田氏の言葉を 照さして貰ふとー もう少

く油つこい。枯れとか寂びの味については無 人の生活はあらゆる點で精力的であり、圖太 京人の淡白なさびしい食慾とはいちじる タミイワシと雀焼」にいひつくされる。東 京をおもふ」の中で書かれてあるやうな「タ なものた好み採つてゐるのは、谷崎氏の「東 「日常の食べ物にそのやうに い對照をなしてゐる。——その結果、大阪 x 本 ギッシュ

理解であり、ごこまでも現世的で俗氣を離れないのである それはよい意味においても、人々の直ちに指摘できることであらう。だから 大阪人は精神的なものには駄目であらう。だから 大阪人は精神的なものには駄目であらうと肉體的な 物質的な物には駄目であらうと肉體的な 物質的な 大阪人は精神のない 本営である

での俗つぼさ、ごんと濁つた重つたるさは、 な感傷に妨げられないからで、それも露骨と 態についての観察、追跡、把握が途中で無要 題だけではなく、それら大作家の世相干姿萬 りで語られるあの話術の 仕方も大阪人獨特 か自由奔放な、ズムを持つた 連想のつなが 學に見られる尻取式といふか 連歌式といふ うに思ふ 西鶴乃至字野浩二氏の第一期の文 象だけを見ても、支那人の賣買上手が日 寄席で聞くかれのはなしは完成された 力を 代表するもの、その精粹であるとしてゐるが オともいひたい桂春 当た以て 大阪落語を しさのあるのとはまるで反對である。私は天 れた油の抜け切り脱皮したあきらめや 窓び 東京のあつさりしてゐるといふよりはすが の毒々しさ、オサネチとした濃い味 と現はれてゐるといへるであらう。大阪落語 落語において、東西人の好みが實にはつきり 徹底を期する大阪人性によるのである。殊に のものである。もちろんそれは単に話術の問 人を退却させてゐるのと同じものがあるや 私は實業界のことは知らの が、寡聞 下品去 でする現 1本商

もつて私たちを一つの世界へ 連れて行き浮れるが、さて、かれの 語を筆記して見ればどんなものであらう。それこそいやしくて護がんなものであらう。それこそいやしくて護しては耐へす、嘔吐を催す位で、面白くも何んともなく不愉快なカスだけが、残るであら ― そこに大阪落語の特徴があるやうで ある。」

私は、東京、大阪のけじめを云鶯するなとお互の特長としたいのであつて かうだからお互の特長としたいのであつて かうだからお互の特長としたいのであつて かうだからお互のが表としたいのであって 貰ひたくないのである。大阪人は大阪を織はず東京にないのである。大阪人は大阪を織はず東京にないのである。大阪人は大阪を織はず東京にないのである。大阪人は大阪を織はず東京にはんのである。大阪人は大阪を織はず東京人のくせに東京をけなす不心得は 殿に東京人のくせに東京をけなす不心得は 殿に被めらるべきである。

武田氏が大阪人の長所を説明されたから 武田氏が大阪人の長所を説明しておきたい。―― 東京人の長所を説明しておきたい。―― 「大ていの東京生れのものが さうであるやうに、かれもまたかれの東京 ―― それも「江うに、かれもまたかれの東京 ―― それも「江うに、がれもまたかれの東京 ―― それも「江戸」の影の濃く落ちた「下町」(勿論それは戸」の影の濃く落ちた「下町」(勿論それは戸」の影の濃く落ちた「下町」(勿論それは戸」の影の濃く落ちた「下町」(勿論それは戸山の手」に對しておきない。―― 控へ目で、折目たいした。

ゝ一面强い熱情をもつからである。──さう かればよろこんだご」

### =

私は本誌に拙文を寄せるの光榮に際し、東京と大阪とに存在する 相關的なもの、整理京と大阪とに存在する 相關的なもの、整理京と大阪とに存在する 相關的なもの、整理など、はまたと信する。

さてもさても女給を送る身となりぬた生選)」へ目を曝してみよう。 火生選)」へ目を曝してみよう。

さてもさでもすれる説を見ったりなりわいのうたてやひとをかい抱く生田黎夢氏の句だ。判つた、「大阪」が判つ

の追慕の結晶である、そしてまた彼のある時 た私である。「潮騒」は飢耽君が亡き愚陀へ を贈られた、そして手もなく惚れ込んで了つ 東京で含つたきりの観耽君から私は「潮騒 れはどうにも仕様のないことだ。たつた一遍 お達といふ名に於て侮ら都 論曲時代の赤ッ坊の てゐる、だからアバタもエクボである、こ 迎合を排 これでものがいへどが大の顔を見 田鼠耽君の句だ。正直、鼠耽君に私は惚 して 賀 か したむい 毎坊靴敷 らのの布 ちらのの布 すれ口裏圏 る

内心の で彼はもつと話をしたかつたのに 充分にそ ある彼の動悸である、しかし飢耽へ君はがく) これはこれ他人には知られたくないことの には餘りに惜しい彼である。謂はいもつとむ あつたが、今、せつかちに理解を列べて了ふ ある。この拙稿も初めは佩耽考察のつもりで 句で刺戟を與へて臭れる人」即ち住田飢耽で 窟を言ふ奴もないからである。「ふあうすと も言ふことはなかつたのだ、情人に逢つて理 てはたい 飢耽と酒杯を重れてゐたいけで何 てこの四月再び東京でれまみえた、そのあと は私にその彼の動悸をきかしてくれた、彼の を向うに廻はして大ツピラに 惚けるだけに つてゐる意地患さで、今はたい全國の川柳家 きだしになった赤肌になった時の 鼠耽を待 の川柳的な筆法で書いてよこしたが、私とし れを果さなかったのを残念に思ふと例の彼 紋太」はずや「睡り勝ちな私に、錐の様な を清算した(或は、しない)句集である。 秘密を私には知らした彼である。そし , , ,

世の中を話すマントの よき父たらん日々なう ろ 妻を説き伏せた淋しさに 明日へ泣く人なら共に 鼻汁を啜 年寄りの理窟粕でも焼きまし る女房は 泣きま 贊 裾 12 かい 41 n 耐 2 3 へて か・ 5 す 元 n

> ました。 阪だ東京だなんて耳障りなこと 言ふなと言 ふんです、すばらしい作品だ。本當に驚嘆し 關本雅幽氏の句である。驚いた、だから大

と言つて了ふといった句が目立つ。 あるかも知れないが、言ひたいことをズハリ 辿ってみた。そしてこれは私の好悪の限界で 以上、私は陶酔して路郎先生選句のあとな 代理々々がついく焼 芋粥 笑ひ乍らもうたのっと腹かきめ 今借りた金から切符代を 出し 堺筋しばらく立つて見てる給 老行をしますふたりは手をったぎ 妻と呼ぶ日の遠からん封をする 落葉へおちば重なるさびしさよ みんな握ることしか知る手 起こさ れてゐ 3 か 文 艸 同 同 4 柳 同 醉 樂 次 鐘

る事質である く吾々は近松、西鶴を關西のみの大作家と思 大阪の近松、西鶴であることはこれ亦顕然た 西鶴であること言ふ迄もないが、事實に於て つてゐないことは事實である、日本の近松、 大阪人の特性がよく出てゐると思ふ。とにか 武田氏の所謂 無要な感傷に妨げられない

おくのである。

ることを自覚せる。 といふ信念の許に、また日本の川柳作家であ 大阪の川柳作家よ、大阪の川柳作家である 東京の川柳作家よ、東京の川柳作家である

> ることた白覺せよ といふ自夏の許に、また日 本 0 川 柳 作家であ

地に生えた各自の地方的特性を生かせる。 之を要するに東京、大阪の川柳作家よ、 大

だと思つてゐる。 とあげつらふのは川柳人にあるまじきこと ちのく」と云つても「きやり」と云つてもい 「番傘」の代りに「川柳雑誌」と云つても」み ることは川柳が 大きくなることだ」といふ 壇の常識とすれば、餘りに無用の譲遜である は決してない、これは餘りに當然である。東 ゝではないか。塊人氏のあの「放言」を彼此 最近問題になった塊人氏の「番傘が大きくな ふことはない。さうした比較がもし大阪の柳 必ずしも「ワキ」でなければならないとい 京の川柳が「シテ」であつて 大阪の川柳が 柳は「江戶」乃至「東京」のものゝみで

が多少でも所謂「放言」に對する非難に 憾である。 を腐らして進退の事に 及ばれるとしたら遺 あれは塊人氏のシャレですよ、若し塊人氏 氣

氏の奮起を希望して止まないのは一陣居ば かりではないと信ずる 柳壇に評論家の寥い現狀に於て 益々塊人

に擱筆する。 督促もされてゐるので 自ら愉らぬ一文を茲 らしがないと想ふが、飢耽君との約束もあり 冗長、駄文、初つのお目見得にあまりだか (五月八日

# 武玉川研究落穗

(共一) 綿谷摩耶火

輪講の番號に照應するもの。) 思ひ、材料整理すみの項より雑然と書並 べる事にした。 御批判に供へたいと思ふ。救て不遜の擧 分につきて、少しく愚説を試み、各位の 受けし事を厚く感謝する者である。 つてゐる三氏の夙に御諒解下さるゝ事と に出づる目的でない事は、 は誤解に非ざるかと思はるゝものゝ一部 を示すものとして、小生も多大の啓發を 梅本、 今その内、輪講者各位の存疑の句、 成る輪講は、凡そ斯研究の最高水準 蛭子三氏の眞摯なる御努力 (句の上の番號は、 各御風交を願 凡て 叉

# 五一冬籠獨口利く唐本屋

問が述べられてゐるが、無論唐本屋(專當時、專門の唐本屋の有無について疑

手簡)などあるによつて知られる。 学簡)の存在せし事は、夙に新井白石の書館に、「書物どもの事豪仰候、己前も申館で多候に申付條き、云々。」(白石先生崎へ参候に申付條き、云々。」(白石先生崎へ参候に申付條き、云々。)

0

# 一一一大張子二見にわかれ雲の峯

叙法としては唐突の難をまぬがれない。 知法としては唐突の難をまぬがれない。 知法としては唐突の難をまぬがれない。 知法としては唐突の難をまぬがれない。 知法としては唐突の難をまぬがれない。 知法としては唐突の難をまぬがれない。

三二一家内の留守をれらう鶏飯・

8のの存在は疑はしいとあるは誤つてる 鶏飯を「鷄喰」の書損じで、鷄飯といふ

る。鷄飯は懸とした存在である。料理調 老鳥よし、毛と陽を去り、丸と腸を去り 丸ながら湯煮して、其湯にて飯を焚、鳥 丸ながら湯煮して、其湯にて飯を焚、鳥 の身を細かくさき、味を付て、飯の上に の身を細かくさき、味を付て、飯の上に の音を細かくさき、味を付て、飯の上に の音を細かくさき、味を付て、飯の上に の音を細かくさき、味を付て、飯の上に の音を知かくさき、味を付て、飯の上に の音を知かくさき、味を付て、飯の上に

七二一夜のしまいもはやい齊日

保言集覧には「齊日。六齊日」とあり大言海には、六齊日に同じと解した項と 一月十六日七月十六日の閻庵参の日と解した項と したる項と、二項目を收錄してある—— それを正しいとせねばなるまい。朔日、 十五日、二十八日は、式日または三日と 稱し、武家町人共に祝すべき日として膾 たっなど食し、神佛を拜し、柳營へは大 を齊日(サイニチ)と稱する文献は今の所

二一七一覧いざかなのさがるうたゝ寝 「さがる」を、 釣されてゐる、 叉は値打

の低落するの意に説かれてゐるが

など其の一例。 腐る」の意の俗語でめる。 番町 魚のさがるほどたづねへ古句

を持つ言葉であると思はれる。不斷櫻、 いふ程の意で、相手に對して或種の期待 ウ出して」は、 本のまっにて宜しからんと思ふ。「ジ 四〇四一情出して賣顏でなし唐物屋 初編に、 「精出して」ならんととあるが、 張合ひのある氣持で、 ٤ 原 3

の句がある。 情出して待つ時は來ぬ演菜賣 類例はまだ有ることゝ思ふ

四一六一さくらが吹て奥の前だれ 趣 〈州の櫻が咲いて、 七 ンべ袴を引合ひ

> と云つた文献はないものか、探索中)。奥 解しては如何であらう。原山を單に「奥」 0 の女たちが赤前垂をして客を接待すると 山の千本櫻が咲くと、 に出されてゐるが、 意と思 0 奥は浅草の「奥山」と 水茶屋や菜飯茶屋

櫻はいつか成くなり、 此俳句の事、洞房語園に見ゆ)奥山千本 おゐらが櫻哉」の俳句を踏 附した櫻に付けた句「イッチょく咲いた えられし時吉原の遊女かしくが自分の でもなく享保十八年に初めて此の櫻が植 の句は此の千本櫻を咏んだ句で、云ふま 編の何と對照しても不自然ではない譯で 句にて知られ、寛延三年刊たる武王川初 寶曆度に末だ存在の著しかつた事は参考 くらどゝいつ」初編序にて知られ の機運があつた事は、 いつちょく咲いた處へ慕を打ち(寶曆 梅驀里唄種の「さ 安政に至つて復興 だ何案。 るが、

四四四

垢離取の見ぬ振しても**棲舟** 

四四二- 浪人にまだ息の有松囃子。 等の類咏。時期も兩者重なつてゐる。 た何案たる事を云つて頂きたかつた。 隅田川舟凉と、 故事)勿論、松囃子そのものは手習師匠 は手習師匠、 く説明されてゐない。松囃子は單に正月 が(日次記事)、此の句の場合は特に手習 高初の式をするのが普通であった 殊に正月の稽古初には松囃子と云つて、 禮を教へるのが常であつたが(草茅危言) 習算術のほかに副課として素讀や小語諸 る。當時都會及び其の近傍の寺小屋は、手 の謠初めの事のみでなく、 に限らず、公武及び東本寺等にてもなす 川垢離の前で屋形の幕が下り二明和 屋根船の唄千垢離につぶっれ(樽一〇) 諸解にては、浪人と松囃子の關係 匠の松囃子や云ふ。 即ち寺小屋の正月行事であ 蓋し浪人と手習師 特に民間 (年中

匠をしてる落魄浪人も、 囃子をやる位なら命脈がある、 匠はつき物である。 ん底に到つてゐない、 の意。 まだ賑やかな松 句 意は、 生活のど 手智師

> 取られて普及してゐるのは前記今鏡の歌 どにも咏まれてゐるが、諸種の歌枕集に

なくまづゑめる君」その以外、

萬態集な

四九四一 なる れは、族衆の泊 みかけ、鼻の高ひ生れつきのたくましい は、 佐野かせうじ、 を追加して置きたい。資永三年刊、當世 男どもを、 の方へ網引きに行き、 乙女織、 上げ本誌上にも紹介されたが、左の文献 此句については先に東魚氐に私見を申 夫皆留守なり、その留守の間つれづ 一たけの揃わぬ・ 五の三「加多の栗島、泉州では 撰取りにして我が物にするげ 此所の男どもは、 宿々へ行て、 加多の洗濯・ 年の内九の月計り 色酒をの 年中東

所圖會、 と稱する民家も残つてゐた由は紀伊國名 にも記してあつたと思ふ。尤も當時に至 に廢關と成つてゐた筈で、 を咏むとの説か出たが、 を弄したもの。尚ほ諸解中に秀吉の故事 である。 つても關の跡は存した、叉、闘守の子孫 三の上に記載がある。 句は其の歌名所を想像して滑稽 秀吉時代には旣 確か驛遞志稿

六八五一十月の空を見てゐる物 月の空模様を氣にしてゐるも 小春の空と説かれたが、 十月の異名を時雨月と云ふぐらひだ 時雨 のとも取れ の多い

+

から・・・・・・・

六〇〇一紀の關守の猿にさすまた

紀の闘守」は和歌を受けてゐる。

さもよひきの闘守が手東弓ゆるす時

六九五 物にかいり」 物。 にかいり を、 0. 物入り、 突出・ 20 叉は親が 買。

> 堅いつくりに得て横道な物にか 的 出來る人間の意で、此の句の場合は、 とあり、 出し女郎を逸早く買ふを云ひ、以て尖端 何でも知り、若くは相當の手腕にて實行 ある者を云ふ語。つまり、物事に對して に「ものにかゝぇっ りの意と説かれたのは誤である。 である。野傾旅葛籠に「總じてあの様子 トピックを我が知識、經驗にして置 など浮世草紙には類例が多いへ續く 彼方此方かけて一筋ならぬをい 世事萬端に互りて實際の知織が 昭和九年三月三日後稿 世諺に、何事にもあ ゝりが有 倭訓栞 Sh



# 面白かつた其頃

食滿南北

△物を食でもヴィタミンAのBのと云はなければならない今日では、

△芝居の頭取さんがタインアツプの、トリオのと仰有る今日では、うか

△さう云ふと昔は面白かつた。もつとノビーへしてゐた。ソリヤ私も若もうつかり川柳なんか作れない。

「オッサンはよやめて活動寫真うつしてや」かつた。路郎君と五條へ行つて、講演をした時なんど、

唄の師匠、さうして川柳家が押寄せて來たbi。 とへのやうな道齋といふいを一覧ブツ通して半文錢君が見物してゐたとへのやうな道齋といふいを一覧ブツ通して半文錢君が見物してゐたなんて云はれて手をうつて喜こんだ時代。芝居道で流行るいろはた

植女に聲をかけたり、扇雀君までが川柳の會に來たものだ。で居つゞけをしたり。田植の會だと云つては新町の楠瀬君の樓上からの川柳十夜だと云つては水府君の家へ寄り。京都の會だと云つては祗園

△イヤ極道も多かつた。名たゝる京の通町の若且那杉村の鼻さんもゐた物麥やゆばじきなどでのみながら作つたり。

歌澤の常坊君や、杵屋の師匠や、お茶屋の主人さんまでが面白がつて

言を云ふやうな事を云はなければならなつて來たのだ。
にしても古いとか、新らしいとか、まはりの肴屋の鯛をつかまへて叱來たのだ、イヤむつかしがると云ふ方が當つてゐるかもしれない。何

らない。云へない。論じられない。
か作句辭典なども取寄せてボツー~讀んで見たが、駄目だ。私には解神作句辭典なども取寄せてボツー~讀んで見たが、駄目だ。私には解

☆やつばり柳樽の北齋ばりの繪の描いた、娘を口詫いてはねられてあた

☆さうした柳樽は自然に亡びて行くのであらう。しかしそれは淋みしいへさうした柳樽は自然に亡びて行くのであらう。しかしそれは淋みしい

△五十年追響になつた初代延著のやうな奥行のある役者はもう出ないだ

無條件で受入れられるのではなからうか。

△面白かつた其頃を思ひ起こして何だかハカないやうな氣になつてとう△あむない~~、議論なんかするのではなかつた。

## 夜るび伸の芽の蔦

-6 か 前-

田 西

愚陀君の死は今に惜まれてならない。

2

つてゐるのではないか。それを思ふ時、

んな事を考へながら、

五月號の本誌に眼

げるまでには、まだく澤山な仕事が残

現在の川柳家が、

新らしい世紀を作り上

うした見地から現今の川柳を眺めるとき

は覺悟の上で、

一番冒險も試るべく、

殼を捨てるもの

ぎ捨てゝ大空を我物とする。ともすれば 此の長い間被つて來た殼を樹の根株に脱 を得て地上に姿を現はすや、 マンネリ は幼虫の間十年十五年、 ズムの房となり易いは、 土中生活を營むといふ。一度時 敷時間の 長きものは あらゆ 後

> 三の柳誌を覗いて見ても、 の愚陀が現はれてよい氣もする。 がどこまでも續いてゐるが、もう一人位 深くするのみであった。 を通して行くと、危なげのないいゝ川柳 層その感を 他の二

川柳塔から拔 草笛のあまれる呼吸の パーラーの匂ひを女つき 輕氣球揚る淺草モンター 郷なりき 破 3 VJ =1. 耽 波

ろくに試みても、 近作柳樽から 言ふは易く行ふは難きを自ら知る。 口笛ころく 春の背乞食の垢が 風に あ 垢 先生の篩に止る句が かから 2 n 75 3 あきら 町 4.

### 玄 幽 境

思ふ。そして、これらの句を携へて。 いと手紙が來た。近いうちに訪ねやうと 談を聞きたいから、 置いて歸つた。一ケ月ほどして、川柳 れを見ておいて下さいと川柳雑誌を 寂といふものを持たす事が出來ぬかとい を訪ねて、 ふ質問であつた。 は中學校の國 去んぬる三月、 種々談じてゐるうち、 語の教師をしてゐる老學究 私は何もいはずに、 俳句も相當にやり、 も一度ぜひ來て欲

もやひ船春を見つけた蟹 春やよし上野の鐘かきいて寝る 紀 太

讀經にちる蠟燭をとり替 雨兄令閨の平癒を祈りて ダ水女にもある咽 喉ぼとけ 閑 生 醉

近作柳樽 梳櫛の雲脂の嵩にも春 真夜中に住吉様の 砂 利 0 來 音 沒食子 山雨

師のかび削れば匂ふ故郷 いち早く春 淋さよ鏡の傷をな しみんしと味ふものに、川柳がその一 が白 でメ た馬小舍 3 0 風 る 有為即

なくてはものに進步はない。

多少の危険

でも見やう。

それ

少い事を悲觀

しない。

吾々は親がついて

ゐてくれる氣で安心して高い所から飛ん

型を破つて新らしい天地を我物とする事 三十六ぐらゐの型しかないとの事である

非常なる困難な仕事ではあるが、

衆作家の談として讀むだ中に、 る藝術家の經驗する處であらう。

劇作にも 或る大

-(51)-

生あたりが、 がよい。なげかはしきは、 だといふ人があれ つでなくて何としよう。 を引いて、講義する程度を越さぬ事であ ず、その内容を見直して貰ひたい。 辭句が卑俗だと、願くは文字の末に走ら 彼等は或は言ふ。 川柳とはと、 ば、 これらの 川柳はあまりその 今に川柳は理窟 柳樽の二三句 中等學校の先 句 を見る

# 开多

n 真を浚却して勝手に態を變へる事は許さ つて態々の形に表はされるが、もとより 10 かに實物の姿を忠實に表はす事を忘れな 置によつて長くも短くも映る。併しどこ ふものがあらうか、 20 影を見て、 描寫は作家の意によつて、好みによ こんな長い燈籠 物の影像は光りと位 がないと疑

生花に、 驚いた事には、 るついでに、 てゐるかである。 生花の事は知らないが、植物の事を調 その道のでえとして如何に草木 性狀 今迄何氣なく眺めてゐた 花道の書を讀んで見た。 形 勿論植物學が今日の に注意が拂は

"

まで真を知らねばならぬ。そして、そこ 中に實に詳細な植物形態學が記されてあ 全書として繙く中になくして、花道書の 展々参考にする和漢三才圖繪を昔の科學 如く進歩せない徳川時代の書に、 不必要な筈はないと思った。 趣きある態が影像されて行くのである。 から作者の放つ光線によって、 る事に奇異の眼を見はつた。藝術はこゝ 一介の川柳作家としても、決して科學の 面白く、 自分が

りも、 淋しがら、 111 な寫生句にどれだけ味があるか知れない る事が尠くない。こうした風な主観句よ 浅薄なものであるかを、 器用 事柄は平凡でも、 、句の上に於て如何に無價値な流した淚、作つた笑ひ、無理な 忠實、、 情けなく讀まれ 川柳的

ブックを見る様なものでない。そのスケ チは作家の持つ眼光に寫し出され 交番の留守へこんにちはく 巻きずしの端が貰へて留守居言 提げてゆく荷物の中で時計 尤も寫生といつても、 薬瓶提げたのもゐる 甲 書家のスケッチ 子 鳴り 園 明 閑 光 珠

> 味があるの 描いても、藝術的價値ある處に、 像に外ならず、こうした事實そのまゝを である。 III 柳の

近作柳樽

がる才人、物にかぶれた氣取屋、 繩暖簾脚が四五本酔 豊風呂に和尙の臍の大き 陽だまりに子供ら丸き紙 つた虚勢家にからした句は出來ない。 事實以外に言ふ事がない。 ふて か る 芝 嘘を vj 居 3 血氣に 存 バット 某 きた

### 本 社 六 月 例 會

逸

日時 六月七日(木)午後七時

會塲 H 本橋俱樂部

交叉點北辻東入大阪市南區日本橋一丁目 電話南三四二四番

兼題

文

樂

座

麻生路郎選

會費 同 金 將 軍 1 筵 住 同風耽選



# \*

①天道蟲 哲 學 書斜に天道 冥想家なんだ。 賣出しのピラ配り その辞一寸 街のピエロ、洋胆特價大 蟲 歩き

②水すまし一一一度は歌舞伎のリンク 家出した影とは知らず水すまし へ行きませうじ

③かねた」き――(細々と、しかも耳 かねたゝきはなしとざれてふたりる 近いのか。きつとこいつは青銅 製、スヰス出來かも知れない。) に巡み入るあの音は、遠いのか

①蝶

一へむしろ秋の、ヒラーとあるか

蜂一つ 座敷を空に してかへり

⑤ 螢 はかなさは壁の腹の死のあかり ― (死んだら灯を消すもんだよ、い こいつ時々消してみせるのが藝 當だつたのかも知れない。 やらしい。いや、もしかしたら

⑥蝗 蝗取り 畦に 草腹が 二足あり 一(君も同感だらうが、神様の方が 焼とは考へたもんだ。 あきれてなさる。兎に角、つけ

8 蜂 7蜻 子がねらふ 蜻蛉の上に 天主閣 — (戰國時代 高踏派。耽美主美。 験── ○一体ごうして眠る氣なん ごろつき。蜜蜂か、あれはこそ こそと貯めて、町人だ。 だらう。

前身は知らず女の薄化粧 工場を聯想していけない。 れ。模様入りは、なんだか捺染 なきかいよろしい。勿論白いの

迎かまきり ― へこのバネ仕掛めご 9 兜 かまきり、こちら、いのるおそろしさ 仰向けになり 兜 蟲 親し まれ 蟲――へはりこんだのはいゝが、 珠山の 陣に …… か。) この前立。われこそは底の巣文 ちと重すぎて困る。だがごうだ

11) ――(牛日く、うるさいれ。何處まで 從いて來る氣なんだい。脚より 先に、俺は尻尾が疲れちやつ

二里來たと知らず虻舞ふ牛の背

(12) 蟬 死ぬことが恐くなくなる蟬の聲 ―― (坊主はきつと、こいつからお經 そのために、お寺にはあんに澤 のうなり方を習つたに違ひない 山木が植えてあるんだよう

13 蚊 歸省して壁に去年の蛟の血を見 ―― (縞のパッチの梯子酒) のみてえ か。あれは駄目だ、毒になる。 なあ、熱燗で、戀をしてる奴の

-( 56

# 14 虫――〈迄頃の家庭には、長火鉢

種の住宅難なんだれ。 といふあの結構な奴が少い。一

油 虫 こゝの 世帯を 知つた色

浮塵子 ――(それつ、切り込めーわあ つたんだ。 口をあけて唄なんか歌ふなとい ―。だから、あんまり大きな

(15)

阪神に乗つて浮摩子の梅田入り

(1) 黃金蟲 な氣の利いた役が勤らうとは思 マリ氏よし へない。そうではないか、カタ つきだ。このお人好しに、あん ― E・A・ポーなんて大幅

子が一つゆづくて吳れる黄金蟲

17 輛 一へ冬 硝子の一隅 ピッと鳴つた 翅音も、いまはあはれなひとあ きつた現世ではある。なむあみ がき。罪業深き身の、あきらめ

蠅じつと冬の陽ざしへ拜むなり

18 蟻 一つわつしるいわつしるい 祭だ わつしよい わつしよい

神輿だ 神輿だ

650 庫の都合でも相談してゐたんだ は點頭き合つて歸つて行く 倉 なかの一匹と何やら話し合つて ひよろりと出て來た奴が、群の うるく、こつちへうろく 取り、世話役、宰領 あつちへ 眞黑になって運んでゐた。音頭 僕が出てみると、油蟲の死骸を やかましいじやあないか、と

して見直したら、一匹だけうろ と云ふ聲がしたので、びつくり てゐたら だしめけに に早いことやったもんだと思っ 今日中はかゝると思つてゐたの もう跡形もない。あの調子なら くしながら、額の汗を拭いて 大漁でがんする」 一時間ほごして出てみたら、

不 倖 蟻をみてゐて氣が滅入り

⑲蟆"

子――(あすば雨かも知れない。 下り、まるでれじれた煙の棒ご 闇の中で、もつれ上り、なだれ ると、やつばり元のやうに、薄 匹は入つたらう。振り返つてみ はらず、鼻の腔の奥の深く二三 で、思はず馳け抜けたにもかゝ た鼻先に、四五尺ばかりに煙つ ぼかし模様の一群が、角を曲

物思ひ蟆子が正氣にしてくれる

20 **3** 旅日記一八日、雨中室の津に 間の匂びがする。 あることよ。ぶんと、儚い、時 身体に、昔の夢の織り込まれて 着。同行卵兵衞下痢の氣味にて 云々。なんとこのキラくした び雨中を浪華に向けて舟出す。 臥す。夜に入るも雨やまず。再

賣立ての 香爐の穴を 塞が抜け



# 社

五月 日 於 日 本 橋 俱 樂 部

あった。 りの t 顔振りも揃って 大郷なごやかな句莚で n 會場、そこへ半疊、 の觸感もす かい 萬よし氏等の 初夏の 省 久し

旦り 惜しくも散會。 きたい程出席者の顔は輝いてゐたが た。時間が許せば二時間でも三 路即先生の 興味深いしかも感激に 講演 鮮滿 の話 満ち は 1: 約 時 お 間 \_ \_ + でも 話で 時 時 間 あ

當夜は牛盤氏の御 満洲鐵道圖の美しい繪ハガキを頂い 厚意に依り 出 席 た 同

峰、 郎先生、 H **艸樂、** 雨樓、 絲 飢耽, 雨 日出夫、 桂風、美代坊、 問路、豆秋、九波、奈 立名、 秃山、華水、 竹 楓 司

集配に雨に雨に雨

のポストへ

肩る 八ツ

大阪にうれしき雨

13

手 を雨

天)短篇を書け

ば

水

テル

地 人)友情に 船とジャ

眠れ

水

四葉、 魚水、 題 變 港 末廣草、子鬼、 新水、彩泡、 里 掛 寒草、雀踊子、 十九、 取 v) 素月、 青見、 萬よし、 **春光**、 いわ 白 か 柳子、昇鯉、 13 な、泉流、 久郎。 かほる、史 3 山新青末里九柳竹秃 雨 廣十 樓水兒艸九波次楓山 同彩艸四山新青

> 小拂ひの掛氣にする も 新掛取りの対きな財布 臍 を掛取りの対談に指輪を見つ眼をかられて来て お天氣の芸婦取りかか 話そ 先に かして 6 から掛 請 か た -3 新 20 世見られ 炭屋です 取拂 vj

ズェテープ、ホテル更け テル窓をあけ 用はを あののて歌芽 春竹萬樂 白春變山同か素幸九日彩子四寒華寒素竹艸耽同同司同史同春 は選柳 雨 に 光楓し 子光人樓 る月捐波夫泡鬼葉草水草月楓樂 郎 呂 光

信信信信人 眞硝雨 遠雨降交雨信落雨 雨園五五春心傷 そ小雨雨羽俄 打手の足降れ通のじち垂の憶用用のに心のぬだの織雨 號號號號生 行雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大雨へボート 大阪 内 での雨へ 変もちれ での雨へ 大田 での雨へ 大田 での雨へ でいた。 でい ずを手はが かつひか 信じまった。 日雨かるられ ツ信 列減が雨い一 不隣隣顏 雨が たる話 力 りりを儲 かつ 生撃として雨が ユア切り歸 流二 专 伽話は狀 1 ごはは出か れッ 1 ついるら 75 見 3 るが は腹のト 上障鰯し われる。妻 せたで見ばには 雨 て雲色 ず 事の 10 は子焼て人 0 てた かい と信 か、口 にせがい雨 赤洗く 切るを 3 給な でな揚なな過引俄替たぬるの 3 續いふ匂俄あ 燕見な號 言嬉 濡や り號る . リチリリギ n き雨へ儘れ雨音き空音び雨り 水 乱華末昇素 同同白同山同變同子同魚同泉同史半寒四雀九白里華彩 柳子 廣 雨

鬼

人

水

流

號 上の

5 の足が

it

り信出

呂疊草葉子波峯九水泡

(軸同同住砂號號グロる號

責倫シ信降ををナSさに 任をなか。 ははずし を がなか。 ないで ないで にはば にしました。 にはば にしまれる。 にはば にしまれる。 にはば にしまれる。 にはば にしまれる。 にはば にしまれる。 にはば にしまれる。 にしまる。 にしまる。 にしまる。 にしる。 にし

ふ信 に主題 が 眼田打る

號き引な場れ連にけ

次

07

し青し見の

釉はス鏡舎つ踏た

を強くに相らをえる番け

に相らをえ

サ近病栅驛猿管思人柵公棚踏下道み越のの理び間越園の切 牧鮮栅栅栅 のす ある景色している。 し切り棚はてれる。 し切り棚はてれる。 かしまればでれる。 かしまればでれる。 かしまればでれる。 かっとつかったの名には、 がしている。 がしている。 はでれる。 でいる。 でい。 でいる。 のあり 棚るの 人名栅儘叱を とが 与はた た間にへへら無 棚 押棚れ親されて親 きにいも便 そ棚反 陽塗れと か・ 並 6 らて豚 「たたれ所かの 感れがる 1 た ちて牛飼 3 つ葉裏げ中の 7: 340 か食飼 起をだ者 五 車 000 びて むなげるる待續な月 を見 穏(0) t り札懸る 会心く リリ畑る棚ちき見晴 t n

樓

耽水艸鯉月

り機 + り欄るれり族居 水 同白同變里同山亂昇が聞春雀九 同竹同寒 新子い山變華同幸萬白い 雨 13 踊 柳 + わ雨 よ押わた 子 樓耽鯉る 路光 水鬼を樓人水 楓 草

お鐵冬言鐵鐵鐵鐵鐵鐵鐵幾新鐵鐵三瓶 じひ 瓶瓶 瓶瓶 瓶瓶 瓶瓶 瓶瓶 瓶瓶 な栅棒 鐵力鐵鐵煎誰 つ越 00 つ切 0 \$ も力 は かか ~ 5: のをが帶のの かへ 出 で として った女 ぎた子 矢ふ湯る 下撫 男视冷錆子來鐵重 1 がて虚 去の顕現さん の母 大きく ざ母え 氣な . 5 出のて 瓶 3 4. 燗にいの好 IE 1: 200 の切 たな鐵 にをま 册 瓶 か 室で 校のこり 仕鐵 代つ 346 い瓶 5 お 鐵 vj #6 姿の 瓶蠟 鎧 かて > 夫のに婚ふ ちょ 舞 れ世 りな 鐵威き かんきめて 番も 瓶鐵 50 T 0 の蓋幡 瓶 かの 瓶壓な 棚がのつ 瓶たぎ が歸棚 膝養破 ぼはで た事 ら妬 か 主横たあ 音 一動筋 --見 かい 3 3 た 子 T 婦 る 談 3 3 てた 3 わつ 12 九 ば とさ組での病お取句提 き組での病お取匂提 n 2 なて買 光る る しれる立 てみ知 留 か 居 か・ 3 ひ守 り也り 3 1 7 る る て け來るる 泉華 春素 魚 緑 變 青禿竹 九素 白 山 子 青山 か 禿 シ 密 雨 ほ ジ 蚓 流水 光月 水雨 人 兒山楓 波月 峯 樓 鬼 兒樓 る 山 ョ 子 絲豆美 同子同史 代 選 呂

# 111 强 き

觀

誳 山 酮 樓

たからと云つて句を生む主觀の働きを る次第で 味の妙諦を體得する迄に相當の 苦心を要す なご、云へば何の苦心もなく生れるもの、 するのであって、ありふれた月並の見方 於てもそこに作者獨特の 様に早合點し易いのであるが、これはその輕 いと物足らない。これは川柳の 本質が要求 では川柳にならないのである。輕味の句 柳には あるから、偶々句想を瞬間的に捕え が特に尊ばれる、寫生の 主観が働いて 輕視 あな

迫力ある主観味に觸れる句は尠かつた。 のであるが、寧ろ淡い感傷に終つた句が多く 上に表はれて來るであらうと 期待して を持つのであるから、定めし 故郷の題では、誰でもが故郷と云ふもの 激き主観が あた 句の

してはならぬ。

幾分教はれてゐると思ふ。この句なご事件的 足りない。添削句でもまだ不充分であるが、 めかしてゐるのであるが、遺憾乍ら表現力が 光君の句は想が新鮮で、高い香りをほの

> こに豊かな主観が孕んでゐるのである。 んを拾ひ出したところが印象的で、しかもそ には別段複雑味をもつてゐないが、黄なみか

故郷 故鄉 亡命の 同)母と床ならべて故郷の虫の聲 佳 秀)拂曉の故郷斥候として 通 同 船の別れ 0 竹 故 郷の先輩といふ吞み 馬の 須州淋 9 雲 友 1 0 は 3 滅 銀 3 杏 仲 許 散 vJ 間 v る 有 葉 輝 柳 花 魚 光 客 親 夢 淚

的でいゝ。尤も淋しく」は月並を免れないが さではあるが、銀杏を配したところなご戯曲 い、濃いものを求めたいものだ。 主観は出てゐる。この主觀をよく 柳夢氏のは「滅る許り」が稍抽象的ではあ 花 源君のは「亡命」といふ語句がちと大げ つて 强

>

\$ るが、先づ無難である。 輝親君のは哀愁を誘ふうまみがあり、表現 美しいが、何となく弱々しい。想もごちら

> こに根強い作者の 主観がこもつてゐるとも かと云へば古い方である。しかし、 云へる。 ろに餘情があり、句境を大きくしてゐる。 しいとか、哀しいとかの小主觀を交へわとこ 別 れが淋 2

と云ふ題の字に 捉はれず類想を脱したのは あるがよく世態を穿ってゐる。殊に「故郷」 水客君のは面白い句である。幾分皮肉味も

だ。少くも するが、情味がこもつてゐる。 の修練として試みたならば 効果があること 劇にまで展開してゆくべきであらうが、作句 方法である。よにこれを進めて行くと一場の を出來るだけ印象的に十七字に 寫すと云ふ 表裏に一つの纒つた畵面を作つてみて、それ りの主題を見出したとすれば、その周圍又は 考へて見るといゝ 或る氣持ちなり、場面な 化の一つの方法として「繪を描く」氣持ちか のを拉してきて、説明に墜してゐない。具象 の特色は、一句の具象化に成功してゐること 思ふ。 葉光君のはごうも類句があるやうな 「母」と「床」と「虫」といふ三つのも そしてこの句

象化にも見事に合格してゐる。それから本題 る點でも優れてゐるが、前句で述べた句の具 と云ふ題意が最も濃厚に 織り込められてる 0 妙、表現のうまさ、共に感服する。 有魚君のは本集句中での白眉である。着想

讃ます やう き事柄であ 様に句作上留意することは な 場合「こきょう」と讀まず「くに」と る 心得てお

を盛ると云ふことは、 句 0 具米 化 たはかると 一句 云ふことゝ、強き主 中に兩立しない

故郷 故鄉 錦 故郷から 夕立へ故郷 故郷の母をむか 故 故 戀 故 故 お 故 るド 彦をか 故郷では先生 鄉 鄉 3 の汽車に映つてる黄 振 行く -ラに か・ 仲間 り市場で 着 話 敗 0 5 3. 0 思 6 聲 歸 フト 3 n 0 便 あ か 耳 中 n る 頃 帝 5 空 縫 V 4 3 故 故 心 男 13 鄉 物 は る 道 女 5 靜 打 0 鄉 は る 澄 0 故 か 0 か ÷ 故 名 雨 水 75 訛 晴 7: 1 手 長 村 鄉 111 加 7 みかい vJ 證 軍 = 里 手 75 運 出 7 居 か・ 也 き 氣 あ 劔 間 始 あ 3 3: v] 77" vJ 紙 驛 ふ驛 机 3 分 3 る 美代坊 美津女 蛇之助 靈 白 一喜 三 松 遊一 生 1 善 天 耕 都 小 留逸 三十 いかち 子 路遊 山 九 光

> 故郷の 長男の 失成功 白い雲故郷 故 もう 朝霧に出て 故 故郷から 故 山 故 故郷から 故 彦へ歸省しば 一人ま 鄉 故郷だ 1= か 拙 話 か 0 0 3. 0 夢 故 の便り 13 n 遠 5 畦 7: みて故 母 鄉 7 ヘラ 父 0 車 6. 聲 0 雷 た # T 女 迎 総 5 手 0 3/ 埃 故 Y え 3 給 紙 かす かさ 鄉 驛 75 1 ; る ٤ 1= 思 黄 五 故 0 1, か 0 あ n 0 2 3 小 時 10 3. 75 分 7: 故 瞳 青 る 3 3 借 7: か 3 夏 ち か か かい 懷 電 水 3 かい 映 あ 足 柑 ひ來驛 話 車け 元 vJ る 雨 古 -5

> > 窟であ 短かい、 2000 きには、一段と泣聲を張りあげると共に、 ことになり、それには句の ない は、それだけの言葉としては獨り立ち き主観を表はすには てくるのである 表情を最も多角的に收縮するのと ある言葉を選擇しなくてはなら 見であ から、勢ひ他の 疑はず」「してみたし」と云ふやう やうに思はるゝかも 張りのある言葉、 る。川柳 のやう 恰度最もはげしく泣くと 獨立した言葉にたよる ごうしても短い、 ・詩型に 具象化が必要とな 例 知れい へばてことば おいて、 200 かい 、それ かい 75 i 出 か・ 顏

5: うに昂 盛られてない句は やうに言葉が上辷りしてしまひ、强き主観 具象化されてゐない 奮を呼ばない。 氣の拔 句は 泣き言 けたピー やうは言 N

ことを忘れてはならない だかい ある句も亦强き 句を通じて 最もよく川 主 一觀の 表はれであ 柳 0 精神 九

### 題課回次

故郷の

川

0 早

2

ts

2 :1

12

0

L 着き 風

F

ーラの 鄉

音に

故郷の天井

思

77

出

訛り

市

場で

遇

5 た

話

夕立を抜け

切

つて汽車

故

繪を描くといふ長 髪

故

鄉

0

j

少女 ٤ 所福田山雨樓宛。 共に事務所へ送ら 大阪市 句。 : 浪速 切 區湊町 但し 六月 る 保線 1 3 + 一般投 H

失と云つて、心臓の居園にカセナー 病院でも 年に一人位しかありません」と 氣の毒さうに語られたのです。 私は「まあ何分よろしく お願します」 と 井上博士にお願してあなたのべ との 表と云つて 心臓の周歯に水がたまるので と思ひました。 か上博士の説明では 肋膜の方なら、な とでも手當の仕様もあるのです が心嚢 とでも手當の仕様もあるのです が心嚢 さうですと 案外軽い むかつきもしないし、 いようなつもりであら 何を食べてもいゝ



麻 生

路

郞

錢 13 尼 和九年四月二十六日沒 1 64 專 年 橋 Ξ 本 + 外 19

> おいかあ V) 世

> > かい

\* ij.

のお力でもあなたの壽命をごうすることが、もうかのなたが、あまりにも佛さんの お顔になってゐられたので「コレは もういけない」と思ひました。鶴峯君や 山雨棲君が非ってゐられたので「コレは もういけない あなたが、あまりにも佛さんの お顔になるなたが、あまりにも佛さんの お顔になる はんしょう れました。「背中がかゆい」とのお話でしたから、「何なら搔いてもられましたので、をってあられるも、無理に搔いてもあげず、暫くして井私も、無理に搔いてもあげず、暫くして井私も、無理に搔いてもあげず、暫くして井むら、辛やします」と云はれましたので、それが濟むとお暇かしたのでした。それが流がら、辛やします」と云はれましたのでした。それが海がとお暇かしたのでした。 もの常一つあ出おにとてな 來なかつたのです。 私たちに とつて

私はホテル生活をして類りに「川柳維誌」の原稿が手につかす、鬼に角宅へ 歸りましたところが、家内が「もう刺りましたか」といふので、ない、一でなんだか、そんなことは知らなかった。一でなんだか、そんなことは知らなかで、からってを表が誰にも云ってあないところです。一では、一でなり、あんたのところをまが誰にも云ってあないので、すぐ、電話せらとは知らなかで、からなかった」といふでが、そんなことは知らなかった。とは知らなかで、からせるをおびれるところですが、あなたとに終雨君と離ちやんも気の赤です。今は無邪氣とでしたが、あなたのなられますが、おなたのなられますが、あなたのなられますが、おなたのなられますが、おなたのなきあととでせるの終雨君は何かにつけてこまることでせるの終雨君は何かにつけてこまることでせるが、子ざもにとつまりに、発雨君と離ちやんと、知らせるをしてなられたが、あなたのなられますが、おないので、知らせるない。一をしてあられますが、おなたのなきあととでは、無邪氣の赤です。今は無邪氣のどちらかが早く鉄 野はてはどうれることをひそかに断つてもよくなられることも 出来ないので、對してはどうすることも 出来ないので、対からはあんなに 見へても、ひよつとしたらといふ心細い ことを頼りにして少してもよくなられることを 出来ないので、 8 ナ のでした。

ちばせし り んい終 屋む で雨 ます 陸ながら體を守つてあり屋です。それがもつとむつけ屋です。それがもつとむつたら 健康や害しはしないかのだら 御承知のごちらかと云へたら 御承知のごちらかと云へたらは慰める 言葉がありま

ないの なに ないようにならなか 心つ かけ けが

たの

Щi 雨

――編輯室にあてられてある 二階へ上ると、自分の家のやう な氣安さで胡座をかいた。奥さんは 早速と階下からお茶をがいた。奥さんの 楽さんは上つて 來らに む茶を出すだけに奥さんは上つて 來らにした、奥さんの淡泊な 立居に、却つて氣のおけ ぬ心易さを覺え 生人公の 無で想の愛想と共に、そっろ感謝の 念が湧いた。 偲清 ぶき姿 九 作ら, その アウ 1 7 1

た入院

いお一人静か た眼れ院をされた當時お見

眼をとぢてる。

たも マーが さの電の今ご出 方留なら カー はた」と先づ なた」と先づ です。 て奥さんに禮を言った。微はそれでお仕舞であった。 へ行くと云つて出まってす。さつき 田 電話 たか 里十九 「ました」 る。そし けた際い さん -奥さい 塵中で単 2: 虚頭な 2

た遠い國へ旅立れた関係群日にはきつとは

奥來を終

んるし居

10 はつ從て てあられただけでも、 はないないでせうの。 はないないでせうの。 はないないでせうの。 をいまれての震道 はいないではるので、私たち をいまれての震道 での一句を捧げて、展記 でも、 が淋しさです 福 ちは た 一隨大 生かと した お祈することに なかもの でし がと願いた

んを清く美しく輝かして、平和と幸福を 集微するかのやうに、あの堰堤からモー 集微するかのやうに、あの堰堤からモー タホートは静かな波を蹴つた。 一夏の終輯には、まだ陽の あるうち に一風呂浴びさして貰ひ、階下の 六疊で のだ。みんなの破れるやうな娯笑をよ そ に、奥さんは 炊事場と茶の間でいそ ( と立ち働いて下すつた。 をしたことがあったしたことがあったしたことがあった。そのであった。そのであった。そのであった。そのであった。当れたったがある。またったがある。またったがある。またったがある。またいであった。そのであった。そのであった。 かず ずるかのやうに、あの堰堤 からモ清く美しく輝かして、平和と 幸福ち上氣した 頬の血色が丸髷姿の臭しるから、だまつて ついて來られつた。そのとき 奥様は始終一行のつた。 75 5 か前た 山は崩れるの 手をひいて 手をひいて な波を蹴った。あの さん 奥さんもか やうな から幸福をと幸福をは、本ちれた一日の時間に、本ちれた一日の時間には、大きない。 成と共

奥徳はたいお一人静か た眼をとぢてゐられた。「御主人は」と聞くと「出勤してゐれた。「御主人は」と聞くと「出勤してゐれた。「御主人は」と聞いて、僕は踵を返して此の事を終雨氏へ傳へに走つた。
そのとき偶々附添ひの 母堂もゐられなかつたので、僕は精子に腰を おろす暇もなく辭したのであつたが、實は 奥さんのおうな辞したのであつたが、質は 奥さんのおうな辞したのであったが、質は 奥さんの は 美人の は 大の とき の と き の と き の と き の と き の す と は を と が つ た の で あったが、質は 奥さんの お さ が つ た の で あったが、質は 奥さんの お さ が で ある と 思 奥さのやうに 貞淑な方は 稀であると思 奥さのやうに 貞淑な方は 稀であると思

# 祝 儀

生田翠夢選

少々の 銀貨 電燈の光りに祝儀あはて これつぼちの祝儀へ禮の何十度 あるつたけ暴れてチップ置いてない 人格の裏をさらけて出す 將を射るための祝儀ははずまで 御祝儀が男一人を 御祝儀を押戴 御祝儀へ仲居ひそ 御祝儀を貰らうと仲居又 仲居同志祝儀の 御祝儀を納めて帶は叩 老練な仲居祝 祝儀は仲居の膝でまるめられ か の野心も入れ 無理 つ祝儀袋に は祝儀がとほすなり いたた 儀の 額 いかめ (話してゐ 圍 を 手 高 1= を 米 2 0 噂 か 代 祝 な 太 す n > 知 チ る 儀 5 b 3 h 3 3 h 袋 照坊主 良之佑 辭 L 天 遊女男 たけ 同 ライト 春 1. 菊 の助 0 2 月 兒 路 8 馬 光

> 御 御祝儀へ頭くな父に見る 堅そうに云つても祝儀は効とも 別に又吳れる祝儀に意味があ 何 引込みのつかぬ祝儀の五圓紙幣 衝立のかげで祝儀を摑ま さ 借りと云ふ祝儀の額は記され 相談をすれば祝儀はまとまらず 祝儀なとやらない心算たまつる 多すざる祝儀に女給チト ボ 一祝儀へ主人の頭 はともあ チ袋紙だけ捨てる歸 n 祀 ち 儀 は ٤ 笑 安 貲 怯 b え 額 道 n す h 石流子 \* 紅 朝 勝 波 人 捐 雨 粽 Ш 魚 由 松

# 川柳家戶籍調(續)

(係) 山 雨

ひなもの、12)川柳に手を染めた年 外の趣味 10)配偶者及子供の有無 先(7)好きな句(8)自信の 1.姓 (4)出生地(5)現住所 名 (2)雅號及別號 (6)職業及は勤務 3 句 9 生年 月 JI] 柳以 月日 樓

の投句に始まる。 のいゝ話にお膳立が出來(9 の幸へ母も重ねる菖蒲酒(周魚)(8)活き 區本町通り三ノ二八(6 三越勤務(7 本橋區正蠣殼町二ノ十五(5)東京市中野 二三年頃、演俱、 (10)妻、二男(11)デシャバリヤ 12)大正 (3)明治三十年九月十五日(4)東京市日 (1)宮崎三治都(2)鶴高千升、 (875)= = 宫 崎 家庭團樂、 新演藝等へ 干樹 壽 郎 子

お

祝儀を忘れぬ程に醉ふてをき

有

魚

祝儀もう煙草を買ひに行かさる

昇

觛

駈引もなく若且那

0

ポチ

袋

あや美

看護婦の祝儀は花をくれただけ

御

一祝儀のそれからなる上酌いでくれ

湖

Ш

自分も貰らふ祝儀袋や書いてる。

規

堂

結局

は祝儀のため

0

1:

平

T

す

天

馬

お祝儀 はかり酒祝儀袋をすかし 番臺の祝儀 御祝儀で語らす女 義理と云ふ祝儀へ吹雲の門を出る 鼻紙で包む祝儀はそつと 他人行儀 献 上 す 0 5 3 厚 喜 如 化 g. T ば る 粧 n b 新市街 同 元 曉 寒 淚 Ш 草 童

御祝儀サービス料となっただけ 味は切れ笑顔~に包まれ 三日居て祝儀の足らぬ朝を立ち 上げてからさていると 床屋から祝儀の山を見て に祝儀なり 戾 3 h 利 新 勇 玉 生 兒 水 路

> 紙祝儀舞妓きつちり替えに來る 御祝儀に生きねばならめ額を塗 銅貨だけ祝儀にならず残つてる 算盤に祝儀も入れるくらしむき 醉ひ頃へ祝儀の盆が廻つ 御祝儀を矢張り貰ふ氣のひがみ 無理矢理の酒もチップに含まる 祝儀もう覺悟で腰やすえて飲み て來 史 久米雄 利 16. 彩 郎 楓 泡 太 水 生 風

族なれて祝儀のたかを考へず零

夢

# 水谷鮎美選

湯の宿の二階から 犬つれてマダム櫻を見に出かけ 内堀に警手 入學へ散るや櫻のそれ 櫻狩舊道をいつてくたぶ 継人の家のさくらを見てか 偽はらぬ人 0 V 姿 3 から ^ 3 专 櫻 知 Ш ょ n 3 哭 櫻 櫻 L 3 b < 貴代志 竹 たけを 清 曉 雅 童 春

ス 春泥の下駄へさくらが散つてる 櫻が咲いた病院で 童心にかへり櫻を折つて 車 あ パラソルの色も櫻をひきたゝせ クラムを組んで櫻の山を下り かされる瞳に映った散りさくら 窓 0 櫻 僕 3 3 は 青 見 通 空 h 勤 貧 元 寒 兒 Ш 月 英 城

(1)(2)大正六年頃
とざしき(9)繪畵書(10)妻、一男一女、とざしき(9)繪畵書(10)妻、一男一女、

十月廿一日 書(10)妻と娘一人あり(11)(12 瓦斯の烙の美しい(犇郎)(8) た父の寢卷を暖める(玉鬼朗)、 原區中延町五六六(6)新聞社(7 月廿七日(4)熊本縣球摩郡(5)東京市在 î )坂口喜一(2)丘 (377) 翁(3)明治廿七年八 坂 П )昭和五年 寒い日 Fr. 酒やめ (9)讀

(38) 春 元 紀 太(1)春元永久(2)紀太(3 明治三十六年(1)春元永久(2)紀太(3 明治三十六年(5)大阪市東區粉川町二七、5)大阪市東區粉川町二七、6)石鹼製造業(7)俺に似よ俺に似るなと見を思ひ(業(7)俺に似よ俺に似るなと見を思ひ(業(7)俺に似よ俺に似るなと見を思ひ(する)、要子二人(11)不均衡なもの12)昭和七年秋

(1)生田秀一(2)江戸みつる(3)明治四(1)生田秀一(2)江戸みつる(3)明治四

重 就 フアシズムの眞只中の櫻 言ひ聞かす子供へ櫻美し 久方の恩師さくらに老ひ 教科書をきく童 心に 真中を歩いて櫻花へ獨り い笈おろせば櫻散 職 と撮 3 櫻 0 かな 給 眞 てる 散る II 3 與詩雄 新市街 糸厂 ライト 郎 波

葉櫻へおちついてゐる酒 別莊でみる見る櫻はあきてくる 観光團日本の櫻見 松山城公園 す 1= 0 去 味 禿 山水生

さくら咲いて皮膚に古典が甦 石垣は櫻の花へ續く な b Œ 夫 朗

様先へ 櫻の 散った き非凡。 な淡彩の手法は成園描くとでも言ひた 本女性姿がくつきりうきで、ゐる靜か みつめてるれば髪のひとすじにも日 洗 髪 シズ子

資物も見せる櫻の 、評 法燈の絶へざる寺の春に建武の昔を 偲ぶ大和魂に咲くさくら寺は霞みて詩 ٤ な b 德

> 探る 步をするめるに住 しその 宏汎の雅味を

戀人の頰は (評 戯にあらざるみつむるもののある清馨 夕べの櫻蓋し數百句中の白眉である。 至純とも言へるにんげんのもつ桃色遊 つもつともよきこゝろであつて詩楽の こんな現想詩がうまれることは句主も る焦燥の街に生きてゆく風景のなかに 純情のながれいづるまへの美姿であ 朗籠であろういつの世にやあまきは の白ろ きタ 櫻 しのぶ

櫻の花のかる さ 5 n 鮎 美

御歡待を賜りました。略儀乍ら誌上 先般錦地へ旅行致しました際は誠に にて御禮申上 一げます

高 松 知川柳家各位 山川柳家各位

漏

田

Ш

チする奴、威張奴(12)昭和五年 答あゝ郵便夫の素通り。君の愛宇宙は二 十二年九月八日(4)京都市(5)奉天千代 かりなり、9)(10)何れも無し(11)ケチケ 人のものなるぞ。月はたド下界見下すば さらり銀の襖のもの思ひ(同)を)悲しき 夕櫻とんぼがへりがしてみたし(同)、秋 末はどうあらうとも火の如し(路郎師)、 大阪春元石鹼製造所滿洲國駐在員(7)行 田通リ三七、 春元石鹼製造所出張所(6

す、 和六年末頃川柳雜誌 (10)妻あり、一女(11)無責任な男(12 昭 鮎美氏等の句皆すき(8)此れから作りま だ村(山雨樓)、晃卓、靜太、葉平、雅幽 多い事(路郎)、赤松のみどりが僕を生ん 出る笑ひ(五健)、子を死なし學校に子の 越智郡津倉村(6)今治市松本迪一丁目、 (6 文具小賣商(7) 考へを直せばふつと (3)明治四十三年十二月二日(4)愛媛縣 (1)渡邊靍市(2)曉童、芳岸、都留逸、 昨日の句は皆駄目(9)格別なし、 一月記念號より講讀 渡 邊 曉

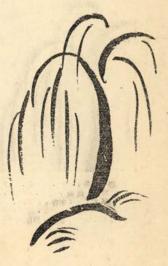
(350)

支川 對對對發 お辭柳撮 pu 3 昭部柳 りに人 聯誌 和 見指趣題出幹張な 九 出路視る「五題感激に訴本健激激 なす。日 合の味 年合社 の太ハ初た 깯 ツキ 月 3 二十 於今治 9 面 1 塲を iv 四 H 市 或

なか 型壁 熊迎 おりて 後者 指川 に にえ書 井吹國の揚柳 狀 態 なと册 入る とり 大公人廣園待 (句會閉會、古祖導に就いて祖導に就いて き棚田 餘興に 史の Ti. 睦 間臺 別会、直端の大変に就いて」 紀電 承一耕健 上の \$ 一選 開 オに日 春風路 披倉 部山

壇柳地各

れ創を句るあちのい



理整南二 • 雨綠 • 耶路

く港マ再恩港嫁つのド會給かな 軸天地人同同同同佳智張 初性初合面 き灯ロッのちや無量初初初冷 りひス握餘連 題憬對對對个對格對稳 ヘ手生れ の面面面た面を面を ま記個茶だ者性へ ロい港港港展噂港返 い飲打 しる者 へ行っわ つか方り 事 のでき漁 打きないきない の核 字望の晴釣れ港がの歌りつれば み心き見ら かばな 0 5 かの踏れつたは なりにまかれた嬉 して 句て あおち 觸 6 ポカ 素に 初 当面 がみわて保鯛 t n めの初 問いなか 3 1 初 2 初 對 心たる護の とする 3 U 0 對 對 面 灯み地りる 面 3 面女面

兆華英四史心容童五同春紫曉西水牛素同牛 賀 風村夫葉朗府明 健 峰陽童子路狂泉 我

有り過ぎる力を下男 地渡りの質力だけで行 サ渡りの質力だけで行 サ渡りの質力だけで行 大生の何かにつけて から 見 せ て 人 からしは別に む ましょうりの は ましょう は ましょう は ましょうり は ましょう ましょう は ましょう ましょう ましょう ましょう は ましょう ましょう は ましょう ましょう は ましょう ましょう ましょう は ましょう ましょう ましょう ましま ましょ ましま ましょう ましょう は ましょう ましょ ましょう は ましま ましましょ ましょ ましょ ましょ ましま ましょ ほるに別卑 るハンマに一女 でを 握手の いそむ力を見ついた を 乗手の 立ふて 7 0 軍に継部され ではしまで 張 no j VJ 0 ち格と べ制力の た成に on ž 富 0 ド母 T: # 驕 7 て泪むあ疑はて度ん風ぬのは女 かまが夜 2 おに おい おい ない と なり りょう にれたなれ ゐるぐ議けは淋ななで雪な頭れ持 か れ女みる V VJ T 3 たみ論るれし U 17 路

熊

0)

晦

111

牛英四九會春健○孤隆薩大史狂矢四小健春彩兆華百郎心英四柳青○一 賀英 我夫子天明村二美鶴彦城樓朗波舟葉松二帆泡風村坊 府犬葉水村美風



會大柳川陰山 社誌雜柳川 合聯部 支

春・人泉・路浩・維須廉・人夢・帆舟 (目設一) (りよ右てつ向列前) 人類天・笑 美・人様・権昭山・助之縣・二 郡・耶 琛 (目設二) 頭 路事 緒錦田・石青・耶島砂・二群・褐瀬無 (目改三) 和時・物業・ 路曜 (目改四) 門羅・雅幹・鈴十五・月詳・緒佐比・耶六・村都・ 泉彦・雄一・歩八・耶喜・人珍・湖ー・迷巻・介之郷・坊巻・男春 村旭・設青



會大柳川國四回一第 社誌雜柳川

 ・總小・美○・解十・大恒・草栓 (列後) (りよ右てつ向)
 二・接大・直艦・松小・府心 (列中) 郭前・居徳・二徳 明・幹主・但五・頭史・泉潔・圖緒 (列前) 路一林・配 明宵・大宮英・降春・道聰 (息全の君道聰) 美

(地)鐵 人)馬 同 同 垣垣垣垣 力力 のへ席 へ 養家々々 な 優 高さへ 優 の 高さへ 優 の 長 から神 樣 知走 版の力がほし いた傘をした。 れへ 吾力 へ樂し ら神ら垣 H のかいべ つかりと子 名わ氣伸 い弱 丸町 お寄が ð 子 せてるか でい するする あからま 並立步た 0 0 か 石丸 3 3 びち 力 力 3 風 春 五四紫西小峰狂紫晓逸-柳一健 夫耕五薩素 英子陽 英子松 選 **一**路健城泉健 波陽童居葉水風二

お原土蔵が見る。

ンと立つ

7

る 3

0 #

のを蔵 紋が飲が

土

孤西五

藏

見る土蔵すれた

とは大事で、

大心五曉薩柳五曉薩一耕

樓府健童萬水健童城風路雜

の織くよう

する

しい

H

7: 2

様に立 顏

で出

3 5

(両)光代い手垢も付いて土蔵(同)土蔵なご構へ後指さゝれ(同)土蔵なご構へ後指さゝれ(大)にの暗き蔵に昔の匂ひょく(大)にの暗き蔵に昔の匂ひょく(大)にの暗き蔵に昔の匂ひょく(大)にの暗き蔵に昔の匂ひま

樓に同 此日の 111 17 主 土催のもとに春爛漫の 湖國松江、郷雑誌社松江、簸川、八束、伯書 の臨 山催柳 の松江市は春風かるやかにそよぎ、商臨席を得ていと盛大に擧行した。 陰川柳大會々 は本社編輯長福田山雨 大會のは本社編輯長 書 市 Di 

市街何れ劣らの満裝飾に行き交ふ店祭の執行日だ、餘興に廣告行列の 30 等しく 映えて文字通りの行樂松江 の満装飾に行き交ふ パラソルだ、餘興に廣告行列の催あり、 10 現出

波、

天痴

一雄、時和、喜 春朗、

郎 あきら、六郎、

正春

治夫,

芳 羅

執

東と知ら

土礦

0 屋

根

0

鳩

井

(天)日

題日

藏指

人)宣誓

込も誓ふ指輪のなると、男 互 の 瞳。男 互 の 瞳。

飛來信

大 樓松五恒宵五宵史健薩柳 選

葉健次明健明朗二城水

行意がた

直警の後の丸の響

ば

待

ち III 誓男た破無富

ナ

个誓

0

すれ伸な出

る

**荒井英** 0

る

vJ

草り

同 0

志警

~

四十六餘名出席者あ。地の柳界劃期的四十六餘名出席者あ。地の柳界劃期的別で常日幹事を天手古舞のさせたの以りで常日幹事を天手古舞のさせたの、以で常日幹事を天手古舞のさせたの、銀管、祝辭の期讀を在し、後終之助氏の紹電、祝辭の期讀を在し、後終之助氏の紹電、祝辭の期讀を在し、後終之助氏の紹電、祝辭の期讀を在し、後終之助氏の紹問中に互り。該博なる斯道諦演あっ世。 しめて後線之助 のもと 選句

た晩

草路、絲之助、 朴泉 打 川柳 美 雜 カ物でむへ関係部屋 結香の結草東上結園誓女叫 ン隙此に題誌 のん白ののをげへ結ふ難び刀物をでむ時根誓に家を日のに怒一團 屋のたのさ 社O天社C り無結團の團み筋れ團客親氏 言力結響結 を居頃計の小園を微指相る 團 7 員 濤丁結 真るかは圏同和心見 白圏圏み結志をれ見 路 結 あ 5: ゼ結 郎、川 のための置の しのな欲かンて のした 馬辭氏 ず 20 盛 汗危 3 ろ 瞳 見 音 朝 1 1. は焚なつ 柳 沈餘春 星 1 なぶ煙と む あ火合 4 1 V 2 雑 一つて 75 默のの 知ま突なあ な遺ける T v) 前 + Illi 總 務 [8] 絲 山卷玉八六春紫羅喋八 美田青都柳砂比一五都六天玲喋 樓 之 縋 詩佐 十之 痴 雨 步郎朗吻門朗步綱緒波介人朗夫湖鈴介朗人人朗

天地人同同同同同同同秀 辻吉屈吉吉吉吉 大照近子空間 の明得 日日せ日くかの腕の音 き時眉君息胸外日迫り日計しのなに鉢のり 日共日日日日日日日 話 日だ へのへた 登えし朝一次雨 ラの音に花思古吉共大つ変大秘の丸お東蓬嬉 同伸吉 である。 では日日日青きりがなきめのげた郷日し坊 ( 吉の吉か兩呂 春く ま吸 日姉日り手あ しく TV T 賣はないや 2 3 て明惱星活 撰 のかの心をび 6. 消 7 響灯んふ夜 る 杖 姉の地 あない 嫁酒 つ差 ある 日る 40 ぎにか みの氣 2 か 3 0 7 + 3 V. 12 # て勤の 75 知 勿 ないにするしき 過過数 行 # すい 3 决要 かづ H 坐 3 見 へげ る屋り 3 3 V) や来りい ひる 2 3 紫あ八羅山祥一羅青美砂喜喋羅大美夢養羅玲八旭羅柳砂無紫正芳 詩靈 雨 門樓月雄路石綱郎郎朗路朗笑人二門人步村門人朗砲吻治

地地地地地夕結人不青地地別地羊地 (大地地地地地タ結人不青地地別地キ地球球焼局々最春球球地球球球焼局なが上げばよ氣のはのがかス儀 禮禮禮禮禮禮禮禮 禮 歌ののののににの禮に な草が 三六 破のの地耕は醉空 1111 つ本球春 涙心な真 コな 題 0 製す らのか ンん飛る上 物れの地やば廻ナだん間の地がが上球地地にも中 出が傷 っ直 鞋峠の 3 ところ 7: 角 球地地 の球球本球 に續 nn 待つて 上へ降 かう機ち にたか 世 住って費がはなる。 わた 2 # 俺 ご見 さて りて懐 るが花を無 からる 度 5: 2 や廻なる居 ゐし廣 暗の行緣吹盛 でも日 75 0 江天痴 ふだれく 1 る 洋 3 v る 3 路き 1 る 柳 介人樓二人朗雄迷帆朗告 步介郎朗

花花花童 ウ花花花り花口花退花花花花 地人同同花花 墨墨墨心工 晋墨墨口墨 笛曇屈曇 花花花りのりに りりべりかりな V 1 1) V) 墨任儘墨墨墨此中尼の ア青妹 女疲天女へに僧 れ書帶來惱 郷見て 出 ったかのたん心やで で静ぐ水 かたいの砂 P 人 る 躍ち ふた値ら れた歪たあ春長誘 は は 6 い紙爪ほ姿か か 花 花るかめ 花 3 紙芝 姿芝の = 12 [ 曇曇通のか 3 に星量なれた ひりりり顔み居男てりりりるり 色居垢り v) vj

六春同舟紫羅六都一喋莞玲比喜羅磨無砂春梟青柳天絲二天喋苍舟青紫 左 須鐵詩 痴之選痴 郎朗 风吻門郎介雄朗路人緒郎門雄砲郎朗人石人人助 人期二帆波吻

11 げ席心な戀コ良虚 持る心ツの心めき だ心し離とし胸の心摑見が心懸がめれ思たに我に我に 無だ心し離 で詫け熱道題 ち様櫻 刑びも 高目酔いの酒呵淋け残に 3. 15 N てれ 版具がで話にかって で話にかって で話になって で話しなる ひてき流にでの歩この淋ぎて屋 中かし 人 れ疲め變むる繪 れ國 眼 し肉嫁の 出る りをつ日 花 れきよ しま かた から 知やる n 届れ尖 it るなが封い塊ヶ色來る來貯る \* なて訛 堡 3 背る 筒日よ 111 1 3 U 3 3 uj L 島彩心心る V) 和 喋 紫 和 雄帆路笑路門介人人朗介帆雄朗門緒翌二石波笑月人鈴助樓 帆 部朗舟一舟羅美莞羅都梟夢喋都舟一喋羅田春養青青美祥玲 之選

十こ旅戀 四のな文 践切れの席び羨拔洗 大符 大符 大 横 馬 馬 取陽と外る高け高矢日の御りに瀨業日程をあったは元た のつつ切切 切て 3 符思切符 持案符を符 救湖なへ目子目り列置遅つ ふ荒影ひ高規高がを塲々て 目死目れ戀慌 い目敦湖なへ目 てく対死 輕握 3 目 高 母れをたはなお残ななと目高 で高 3 6 て 5 かざ列 か 3 ん洗高 知でなる とて横 たなが る 殖持せ 3 7 1, 的加加切 2 L 3 vj 11 3 V) 旅せ る場げ

旭田青一帆都鈴玉砂同舟都紫山草紫綠八玉同無卷草青田夢柳六舟羅山 鶴 選之 葉詩 心。 兩 京 之 東 鐵 砲 二路石織迷人郎帆門樓 村緒石 錐 介 鹿女郎 帆介吻樓路吻介步女 砲二路石織迷人郎帆門樓

春卷山莞玉耕喋都砂玲夢紫無青綠喜夢羅 雨 菜 之詩 朗二樓路女二朝介朗人迷吻砲波助郎人路

同同 席靴親 題下 03 工破を 事へは胡坐 塲胡 C 坐 話 强 ひ國 5 一選勝 n 3 V) 拔 角 カ天ひ さし 秋

V)

(人)工事場で馬の一足の (人)工事場を背廣で馬の光もうす。 神神 柳 塔 (第二十年 柳 柳 塔 (第二十年 柳 柳 塔 (第二十年 柳 柳 塔 (第二十年 柳 柳 塔 子 の 日 ) 養子した養子しままれた養子の出來て養子しまままれた養子の 日 向ぼこ養子しままます。 (人)冷静な養子は降ふて 日 向ぼこ養子しまます。 (人)冷静な養子の まままます。 (人)冷静な養子の まままます。 (人)冷静な養子の はれ養子のした養子は降ふて 同 前による (人)冷静な養子の はれ 後子のした養子は (人)冷静な養子のした養子が出來で長子の大きな出来で長子のようす。 のめ戻長へ母よ 1 夢を落 尻の様へ へ桐にするう花がく遊に考を 露跡通み の居がなき便る笑 び出入へ見山 持つの下場がなき 臺の拔か りる ひしりるせ雨 店月けれ 若某水の九一村明比喜某水久樓 ま 夫 夏 蛙人客し天光子坊也山人客雄 い同某秀 さし

全を支函三月部慰部第二月

4

75

る

の捧い

間は全十二

る國を日四

るために心からない。我等を愕めて、そのからない。我等を愕め

柳友並

L

全土一十

V)

た

3

7

支玉

凾

館

大

水

慰

問

向

~ 83 の申夫伸ま ねつの心なねか廣文だ さなす行じなすのし住野の地拜 るけ灯し出るほし字しすりる 婦びし くやりる音み居原地獄む

機仙沒自し友南玄春自八多艸白四沒美水昇機四白春丹友南申村溪 柳子步 0

目久背つし が花母りのび 八選水四白八四水帆白水八丹し水<sup>子</sup>村春四沒艸村車 雀四村水白八白艸 評 路柳 選 の 選句 食 句選踊路句 柳 歩 車平子步葉車 嶺車步生ぶ車 茂光葉子樂茂 子平茂車嶺步子樂

女展務廣 秀惜惜湯春春惜 薄薄頭薄 幻幻桐 Ti 切切切切切切 にのへと 京昆甘戀 名淋たな 所しい判をき氣じ 云手の切 人息持い 5骨1 ヴス情で 目 于 浮 去忘と 句 ふを孤れ がのもわれ俺ス たチ恨長 か L とづつ女 0 て伸鴉な い柳出ヤむ煙天媚すぶ失なま來の養散い ニ春がの くばない = しン豊管痴態る背道りりる子 る驛カよち脛ン れしり夜 1) 松 卷<sup>人</sup>同卷喋六<sup>人</sup>卷天喋<sup>耶</sup>夢喋同失二失祥青六一天卷介聚 選 痴 選 道選道 痴 選園 二 二期耶 二人期 迷期 郎月波郎美人二 江 か雀白白 江踊 柳 る子端子

提坦 ① 金主 应感感 行故靴脫 手手 軍郷音走席るが 月雜川軍鄉音走 合顏寢 那人為一人 無滑さな な眼中な鏡 さかで 心心 辻るの のち水 なっんい隊自食 拭鏡に戀を あそ 色込平 をかむら も動通 月ッの癖 句 嘲卓 るめ 弘 6 失かり 1) U 5: と水線 をた 儲けごがふ かった日か 00 知もから直くいか お鳴曜あ六懐自 あく曉つな拔心返見れ な平の 童 る互り線果 りる ていけ りり日る 手 嘲 小十樓等一小心等童史曉十府曉背心 治 十史心明童 卷失天夢即善天 選明風松府明 朗童靜 選報 童明府 靜朗府

「何精踏マ 一訪土春ひ幸ピ 7 あ出月雑川 旅て 中 於 青旗の勝 03 夜り 岩型の土質の土質 の変闘を 型に信ををは のむりりうの見 な號出出上奉味が出ぼれない版が、 を事 ながは け路 り所し 愛すしち しり 3 4) 3 田 基だ遺 紀青紀青舟清夢同翠舟四青勇紀郎 選 太踏太踏々美 夢々葉踏 太 憾

逝逝逝る 住所がの 春春春題世れ底題提へ へななへのが强 る男 片マ淋フ逝底一く底手同 戀ッしょくにつ光 だチきト春義心を 旅 たす友の たのは プ手 事はの緒 知底以 句 生へか をふ黑ゆ か 知淋眼の一起落え小 7: 在り かい りし鏡 るちし 小背心曉風十曉十松曉心 選 靜童靜 樓明府童

童童童童童 7; 月雜川 真真真真真 席をのたはた席九誌 題笑無笑馬 論 图日 社柳 ~口 つ鹿 夜 LI 長ばにて馬じ か 月暗友鹿 女がく はかた貞 詩 於 呈す 自風酒 事 社 例 嘲がか酒し 天す鳴ののが るるみ空り 須 人祥卷祥都莞 選報 之 月二月介路

豫こ國锋眼想の民想鏡 紙層パむ層紙 王膝膝初い 手固も孫つ 唇籠々つ拾屑 くあのま席をへ公つひい席信 行る想つ時 0 け心へての豫かのはら膝膝 ててが女いへ層 不う。給か大 ののる夜な阪 んなみがてる 夜に去りない。 事豫の に想聲てし りての暮毛 な聞が来が なる洗れ糸舟 背ら夕は二階紀見 りる濯る針 きす想き時み 3 V) 3 舟紀勇翠青郎同清翠勇青 同舟黎青勇清 々太 美夢

人アさ腹笑煤錆のダてなへ拂び 座た落父長膝 一種 夏福日 輪 算情算算ひ 二腹朗暗 盤熱盤盤と 布 60 輪 立 関なれの笑 心な夏ょに席世 よって福四ま きでで変 りもかな喜た席のへががひ席 てか所席心な夏 はない。 はな。 はない。 が題 豆豆 聲 豆腐腐 豆豆 がが商屋 ふせつ男神 んてのの乾 きにふば腐 顛劇 男分 しつの飯置 とつ豆聲 し事日締し 座っかになるら か・ たま腐を 3 の笑 1 でほ 飛て 陽をがめて だな し夢云んねする若な つれ資か都方数心あ離れか失てる濟 きずりけっなひく地り るる戀見哉み られる ひだるる る戀見哉みい V) 3

DU

天地人の歌を入るのでは、大地の歌を見るのでは、大地の歌を上される。 と無月 け題いつ守 る まではしい 生で消しい でではいない ないでする。 た素で守しあ守た 供女う智報べて 日を守 **勝とするに** のん居れに叱 ざいすりとのをしないすりでは思ない。 か壁一に る 一 トらと守 とが女なら 忘がつ殘郷 電車の母しる。 電車の母しる。 ここなり れたりるされる 争 議路島 る 方路た永同青た正同同柳あ同葉方郎生 け ーけ き 選輯 正生を炭 路を甫 秀女

咳た別妻やお父晩押留留留

タタたタタ 日顔そ方暮 初豆豆獨 七腐腐 ののかのへ席 H 影咲れ雲遊題の満の 豆底 俺い音淋村吟 がるるた 1 ut 0 い子 な計氣か 阪

> 夢莞都祥天 天磨祥夢 痴 須 人 雄 月 迷 迷路介月人

子中舞 麥煙用 筍 風 お 光 筍 筍 鑵 が は 流 茶 明 の だ 病春綠 草店でも 大さへ私生見認 大さへ私生見認 大さへ私生見認 大さの電話二號へ でして大學な でして大學な では見てぬますや では見てぬますや ではまする。 ではまする。 ではまる。 ではなる。 ではな。 ではな。 ではな。 ではな。 ではな。 ではなる。 ではな。 でな。 ではな。 でな。 でな。 でな。 でな。 でな。 で の仕 75 や陈 た淑 を判 筍 で と形に の と 形に の と 形に の と 宝宝 春に も床籔詰堀るお そ人 5 筍 けのの雑土呼をな目 ず靴え 8 ば入る 3 方像き れとは \* をで筍く 12 は 5 卒っと か稚筍知買突筍の意れ出 4 10 ps L らは 先光日願口 3 故脈切 る和ひに くつ H 3 濁に + 解 75 20 5 30 のかな かな見出せ路云給る路の見れんれ 4 if る 3 けり る ず 3 ふへ船 土る あだ 3 方同方即利路方即柳路青青正渠同 同菜同同利同同同 青同 柳香同利同路

選 生 生生正 秀生路路前 子

(同)一號と二號とで (両)政治家の二號 (軸)政治家の二號

とで

見

一卜汽車 あ

(生)鐵 屋に(生)鐵 屋に(生)鐵 屋に(生)銀 屋に(重)銀 屋に 同 雜川 月 誌 社柳號と二 Ξ H たいないないないないないないないないないないないないないないないないできません。 夜 月ひ 鐵 於綠之助 月 きがる路 がばるひに れてる知日の愁終 居 南月の之 一出 る 綠 心之助 石同羅比 佐選花 門緒 好同 報

女晚

題の

句筵 みの三日

傘間 は関か が 務

? 春 五 一点とみの背の

ちいの と は は ない ない ない は は は ない ない は は は ない は は は ない は は ない は は ない は らうと姿野かれ 寸まり 14 疃 べりけぎけれ V] るび既 た同同葉一路筑山同た同氷同柳 同路同永同柳山 U 65 秀彦を 杯生川彦 な

い禮となか

会院は切れたまんまの三味な一葉のでしまって「温のがいつも本家の子をした。 長きせるもてば二號の膝と表きせるもてば二號の膝と本妻。一覧はごつちやに遭なに出る丁稚(同)妾宅の二階はいつも戸が(同)安宅の二階はいつも戸が(同)お孃さんと呼ばれて出る丁稚(人)妾宅で見る夕刊は相塚(同)お孃さんと呼ばれて一覧の膝と、本妻の方が終いた。

が稚號

本妻きせるない

船が切連

いつも本いたまん

5.~

風は烈に 亡父 (天)二人になって、 (天)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 (大)二人になって、 変の思紹にいなる。 変の思る。 変ので、 変ので、 変ので、 変ので、 のので、 新豊脛 父 手 灯 目 雑川 は 烈 烈 記 が 風 た 題 とな 心 お旅 on か 手 膝 変 手 を 変 手 玩き光乳母が発気 切婆で V) 上心 あ の手 うて if 話 一人で 5 題 母 なのれのないと切られるか 人た 心ち叫 と食へ りに 一に母車 さ霧死ん つ抱 03: 残さ取の 陽 泌で青る やお争 L か、丸 手に 00

さつき句會 かれた。そか たので その足音を伴奏に が ぶ 交 社 した意葉 める春だ好のるい比 をあた春た羅れら寝田 てれ自織 0 夢い夢佐 るり懸風り てれ息額 石羅石綠田 楠 楠之鶴 花門花助緒 羅田好石稿。選補 羅好田 鶴選楠 門郎緒 門緒郎

草葉だけ席 たしなみを忘れたしなみを忘れ 石海春大雀石鞍 一岸のショ 東る石 が散草 愈引借 花あ三 責明札責 弘步す 入任 山 一け傘 任鏡 牌 海本 枚目妻親題 " 石席 つ時 0 2 0 止を つこっ濡れれれて見る。 の雲雀を悲 石に 水預無題でつい IV いの題 む つ借 to 雲雀 のけの素 悲濡 だ奴 鱼 顏顏 戀 れた 11 居の 數へ Fi. 雀 0 か 任顔でふ 7 い雀名 2 3 投音借に 人 0 در V 3 H 雲唄子 Uť 0 惚か 北 あ げ 4, 75 1) 雀にが 父 かかれ 爾 7 3 有 3 に飛 めて れて 消場 飛合探路 か 模 V) 見 理 る故 加喋路 ~ 7 な戎 ん様める え街 3 居 VJ 橋男 J: U 石 3 3 郎 同秃四清 同四同 あ禿清舟紀 四清あ 清あ四禿舟勇紀 紀四 舟清 避 0 20 9 山葉美 美山美 々太 葉美 美美 葉山

責任は

も者

有 ٤

3

か・

5

ま

同同

0

川右

呼

U

出

3

地

一責任

て鳩 9

は目

た 女

つむ

先だけ

店

15

あ 清四

cp

任

to To は

鳗 果した

0

うに

げて

る v]

置席

炬題

30

繰

力

3

炬燧

CA

3 tut

腕會

英

田

村

貧乏な土方夕 焼 一肉 地 天 地 四日へ 人戲美 牲 pq )鬼煙 月二十 者 遠 號席 非席 花 席 **遠慮なく寫眞師だけ** 化嫁は嫌な噂もチョ 続外屋不安な村に 足様から姑の目で危煙を強人雑誌も直炬様腮でページ 供常時 來て 娘題 外題 to 公等も 出した工 か 「風呂 でした日から煙あ,時へ飛行機志願が場 水 得け盛 八日 號外」 付意の咽喉 vj か 事通 師だけは 炬 小 玉よく サラ 喉を 壁 あ 3 1 曲に ぞ 大 2 7 V がらない 命令 れす あさ 線沈義 聞通 T あ光合 竹明 I. U 神 i 3 め風 事 3 VJ せ美 3 3 3 15 [v 卢 楓珠 義 登 志 法 治 登政志 義風子 溪膀丹 端同 義 風子 選報 平治治 月 则 T 龍

柳

話會

H

月

24

H

夜

A

B

C

77

7

x

へる笑ひ

水筒清 平平 早 お夕 片タタ上お ラ銅兄 H 鲍 利は商賣が足の人で氣がほろ月舞妓 何知にの人で氣がなる人類ないの人で氣がなる。 層 起 像の 刊 凡 凡 13 當 な幕 へ方 7.5 è 鉢 堅坚く 3 0 り日 幕し 雪く 遊を起 月二 于 へ向 0 が朧夕脂の らし 早男 H 邪 茶山 つ月刊版方 階 足 遞 直 そり のい 7 步 7 不 13 窓が水 酒 上 m サ 1] あく 期 足 P の積 水 75 7: 饕 は ツ + 氏 からい 臭い いて n 0 21 惠 目 る を迎 る思 る 子 0: 像 の案 旦若重 \$ VI かさ 交 遊 o: h 貯 か 0 も いな たの 那 ^ 2 どあ る 7 金明持病 n V) がはん婦 vj 78 點互 3 左 4) 帳 ち v 來 3 る る ス る L 同 春幸竹 霞幸 明華 震 華同吉同幸春霞 選 川捐 珠水

秋捐楓

-( 77

捐秋川楓

捐水

今川 赖秀同一佳 治柳火長手春長 野から離舞ない。 大外が代表でいる。 でいるが、 が代表でいる。 でいる。 でい。 でいる。 でい。 でいる。 つく日へ南一の 部誌 桃手人が名 お < に Ľ ま 文

童天ち山天童

音め男戀優

童峰陽朗

1

松口一ジ氣國見 交朗おお教 おけれるいかのでは、 なとし 脚片 11 7 絲 さへ浴 1 ははに 入べ 12 --へかヤイロがにかれていませんのできるいっぱりのない 1 中 た諡恰つ 去 3 り飛 度で 曲 + 父 40 のない 御 1 向 がの飯ら + の中が空か U 30 叱行は合み 1 (3) 飛を 2 + + + と国 1 + 6 п 1 1 3 日を 1 1 3 £ П 1 Ŀ 0 п 愛 ~ れ詰の 舞り時 ~ U 知 vJ CV. 1 3

同山同五素靈春 雨 樓 健泉子峰

山五耕素春 酮 樓健路泉峰

馬芽ょ新のかつ芽 摘ほる 目と いくにまか はどの風に新芽へ へ起 す出 0: 染 柳來 3 の上 田 3 水 車 同水同夕

鑰

吉志香醉く同同文岐

5

证席伊

洲 選報

醉溪

藤

ち

第

#

n

報

同軸秀同同同同佳山山當山 山山山春山山山山 Illi 丹丹丹吾丹丹丹か = 山醉 T 一様 屋 く 御の着口は櫻を散の着口は櫻を散の着口は櫻を散の春の家に出る表演の家に出る事が長壽の家に出るの意と成つてきな長壽の家に出るの意と成ってきない。 コいて 神 前 て來癡 田曉 Ŧi.

も高人の意で酔り 間笑す酔な來か 1 会味燈來る もひるひし 1: 同五史晓宵小逸背背健晓心健童 健朝童明松居明明二童府 眼折讀 鏡鞄か 吹 月 お眼あ

方屋 さ計 雜川 が根 5~ 誌 く瓦の朝朝 社柳 ひがみ朝の ろけ 見ある気気 梅 ちて 色 4 H かるの 朝 誌 ひれりひて 0 上 のけ出 61 るか. 報 同觀鮎觀靜 選報 月美月波

一とばも

二府

朝ふ味

佳のる噌

佳

男想を登をといいは、 動となるといいは、 動となるといいは、 の子的な活氣の がお巻ををといれば、 の子のが活氣の がたるとのでする。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 のの子のができる。 ののできる。 のので。 ののでを。 ののでで。 ののでで。 のので。 '朝を活氣 朝も 0, 事に活 れば素 かみなくなななる 活たた 凉し 3 校庭 B 氣つ の地返た寫 みけ 下事十さ 男に太つりるか講前か てくか 黍足 なすい 3 す五れ 75 3 長野 明袋る 六る 3 る 錄氣き 渡 史 逸晓童 小健心同曉十紫史松 史背小健背十紫 郎 選

車

佳佳 雨姉 揚 はきないた本 + の妹 吟 眼朝の H い美 布士 催いへ 0 五 促て眼 於 鏡ほ 伊 月 ん朝 ちた 豫 20 句 7 り拭 相 け水 3 Fi. つ1. 7 てあ か、貨 頭著 ts it 生: ふない vj 4) 支店樓上 6 3 同鲇 選 美月波

# 窓

Ш

20

督刊 > 捨待次促を

1

をに號を

乞副か 頂いた

樓

等▼が筆めたの▼の郎▼賜箱かた一書▼がに倦川▼が完のは▼ら辛如 文章其他で競り 高島 高伯を煩い ある。 りたを得しやた ひそ 本觸畵 0 前 氏綿 む 柳月出へ' いそんで 古狸窟 評來のわの谷みにはる愛れ熱摩が徹 しやけ間 を執筆したが、表 行た)本號には たい、本號には たい、本號には たが、本號には 執筆 る。愛着 受着と興趣な深め。 能つてゐる。 能ので、武玉川茲 がな研究考證にな にないな研究考證にな れ熱摩が徹も 忘れることの出来ない。 電雑筆』柳壇画報』、 等大號に割愛した原理 等大號に割愛した原理 の・職に割愛した原理 が、御諒恕を乞ふ。 の関外喜様の永眠は機 のる。 0 定以通り 上に路 深めること 氏を類は 好柳毘賞 增郎 は園 なるも 原旨を頁先 落 愛情言なめて 果 -111 L い僕 稿雜初 1 生 を虫を讃然 か 7: 研

ぬところ野

別なのト忘つえを駈しはれごでされれて始けく公 でッヤ 

面其 目頃

> 談大う面と本語では近りません。 割面と本語とは近りはけられた生 は道りかれ、 は道りがれ、 は近りがれ、 はでのかれた。 は近りがれ、 はでのかれた。 はでのかれた。 はでのかれた。 月二 E > 811 忍な項の H かない 単本 単本 本 0 大 阪

へ「うち

毎

朝

フト

2

こんなに

あ

に言生

葉の

三甘

自

喫の絡營申等 溪した。 自譯に時は が開かり ス動 が挨問 7 車な拶 のとで聞って大がれてゐること 3 it 0 UT 6

た。そして明晩の は公用で伊豫の根はしばしば を忽ち十年の鈴暇を割い を忽ち十年の知題した。同氏 を忽ち十年の知遇に をの鈴吹を割い を変まれて での鈴吹を割い を変まれて での鈴吹を割い を変まれて での鈴吹を割い を変まれて での鈴吹を割い での鈴吹を割い での鈴吹を割い での鈴吹を割い での鈴吹を割い

すれの高堂▼ 新 べて「須展東美報 新夕別正▼同百てつ行共都▼たのの目か友▼ たかに大東手四はに 名光東嵩圓 つ諸 あが 啞る 堂三 望京の 7: かさと た 、漱 々味五巖 こ十氏 さ八光 月松柳 れ日を戸 備れ九の號堂壇 治の れ日をご有息日存る夕慰號志をを高 へは買った書 成 で 川に川 贈店景 2 感 月來な お柳亘柳らか 童を懐 吐るの 見友 り讀りとれら 服 8 して來 . 本掲いた一 で一大に関する 0 內 來 至同と載ふが巖り氏稱さも、松 す會塚 時 5 殘 ,松 事 る一越

。れ女令上を二夢 幽り業街の ま子園げ開十君 君まさに令 は すれて閨 = ま一松 カカフェ H お喜び たった。大 亭って石 LI 來

Nishinscho

のので親しく で、片岡
ない、片岡
ない。ことに
致い、岩
はい、片岡
ない。 してカ ▼びつ上御事け兄多以▼ 本致たげ返都 まの數來前 六二社し事ら事合し催 卵の號 御定並警 月ッ主まなれなでた促讀延は三の催すおな差一がを者刊創 三日と す。 慮し寝片 0 詫かし々家受諸

友○真京 方君音 方にする。 一十三日東 一十三日東 江、樓君、十一 大福 泉西面 八連市臥龍臺三城氏は満洲にも 會柳合の君の姫田神 よ田約五電 り。○君間七り 〇五日五 養月 豫日 2 藤五の見と 一藤文郎八見と 白六の九 三永 v) 十住 ◎峰日瀧日○君三よ三 70 六の 頂

な米 つてさ

> か・ 活退街 し逝君全休 まする殿を を社君 望さは 旅 みれ家 れ父 0 3 ますしの まは 4) 6 でした。 便 し五まれ た。十 哀八 一上 塩 日 春▼そ阪東▼番 光本のへ京京地

諸山せの次小

君雨らで五島れ

私 き は 上 立 か よ と は よ な と さ と さ と さ と で ひ ・ 。 に 大 か 。

樓れ路月大ま

3

まし

私,

雨

氏

令

闥 雨

追

悼

句

會

水 俱入本 6

七

一後

目時

所時

交大

(電話南) 叉阪月

東日

粗 菜 粗要 供 養 絲雨 氏 VJ

前 IF

行本げ 見成た 6 \$ へのす 未• 頁 から (to v) もった 2 b 7 鳥·月 it 見 た。正 0 美 だっ 同 十 3 月。 1 き・去號 44 7 H 7 3 頁 6 8 0 no 頁下段二行 頁 6 n 17 項•頁 + 頁 ン赤子 終 同 应 + 30 かりよ 三行 Ti 行 3 頁 5 は 行 十三 vj 膳 句· n 御 C かつ

會同兼 題

不

金點

三三

句句

橋麻麻

本綠雨路路路

丸

喜

3

2

no

憶ふ

三四

0

番

### 規 定

▼「川柳塔」への投句 投句は總て葉書又 各地會報は牛紙判 「近作柳樽」は全作 の原稿紙に清記の は同人に限る。 家の雑吟か募る 號な明記する事。 認め、住所氏名雅 種各題必ず別紙に は同型の厚紙に各

盆

踊

服

日

野

る事。 ・文章は二十字詰出 書體はなるべく楷 紙判原稿紙に詰め

凉

團

締切は嚴守された と封筒に朱記する 書「川柳雜誌原稿」

投稿其他に 料封入の事。 問合はすべて返信 つき御

### 募

集

## 第十一卷第八號課題 六月五日締切

各題十句以內 高 橋 か ほ る選

+ 卷 第九號課題 七月五日締切

第

包 臺 扇 號 市平 前 (各題十句以內) H 沒食 Fi. 子郎 健選 選共

文 各地柳壇(會報) 章〈評論研究感想吟行漫文〉

無 禁

八阪市住

載 艦 近作柳樽(黄

路

郎

選

發

社

社務。 融廣告) 務所宛に願ひます。 切。 0 (編輯に関する件、 用件は下記川柳雜誌社事

店書捌賣

(大阪)

大賣捌

定 牛箇年前金(特輯號共)壹圓 部 金 八拾錢 拾

28 料告廣

杂

は御 御一報下さいますれ ましては本社へ直接 本誌への廣告 相談に應じます に就

3

0

0,

香碗

送本封紙

但集金郵

水選 價 御通知願ひまず▼川柳雑誌に關する御用件は個人宛にしない事 何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して (一年分) 便を差立てますが御不在中にでも頂ける様に願ひます、 に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵 質であります▼誌代受領は送本によって御承知願ひます▼ 御送金は振替口座大阪七五〇五〇 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢 には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には 一つ お拂込 かに 75

昭 昭和九年 五 月廿一 五日印刷

昭和九年 六 月一日發行

第一等十

回卷

一第

赞六

月一

編輯無發行印刷人 行 大阪市 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 四 成區玉 電話天下茶屋二五十 電話天下茶屋二五十

吉 區平野 西之町八三番地 話天下茶屋二五 t 九無

柳 電話天王寺一一六七番振替大阪七五〇五〇番

京都)三宅(名古屋)靜觀堂 東京仲見世)玉森堂 二盛 一社書店 (神戶) 米田、 明文堂 寶文館 其他 市 函館) 内 各書店 石塚

#### (地域) 々人の係關社誌雜柳川

末淺赤藤藤國長長長田嘉笠片岡大長池助 弘田井本村枝野岡崎中納原岡本道谷澤 殿 中 中 東 市 太 即 長 路 直 一 弘 一 樂 下 一 司 助 作 耶 落 耶 秀 二 純 生 方 平 雄 徹 居

柴前前安長窪谷田米川川龜岡大大島伊曼 谷田田 八野田 脇孝 あ 村村村上井田谷島山藤 柴五雀流吉波素 之 ん 花太 最 面 花 福一彦 舟健郎美高樓文介馬菱郎修子村明步造

村中中立谷大大西西長市石岩 森小藤蛭原 松澤西井村西鶴村村谷塲曾崎人 林里子 春 お登 川沒根 東 東 京 好 省 建水 む坊 稔 步 由 珠 月 汀 子 耶路 魚 人 古 二 雨

三宮喜北北笹眞吉吉後近明阿江熊奥 増松 山 輪岡多山川田田川田藤藤石形戸谷野位下本 あ 夏白春悟 や角幸 啞水青 柳一つ 禿汀 柳 曉峰秋耶美丸捐人車兒勇次杉 る紅山柳子 迷

高加西春生 首須妹毛平東日姫平平芝水 橋藤田元田 か 藤崎尾利井谷野田井井 四 は文艸紀零 竹豆變九冬間華夕春蒼 監 る酢樂太夢 楓秋人波呼路水鏡光太葉美

-( 82 )-

改跳、移轉・句會案内、柳書廣告、ごに金+鲮(但も前金切手代用可)では金+鲮(但も前金切手代用可) 一行増すご その他

川製並 柳 より十 雜 合本第二 一卷

申込 中込所 大阪市内送料 市外送料 市外送料 雜四壹壹 圓 誌 元 元 世六十四 錢

## 題 六月十四路集

大投質喧用の 阪吟品と紙他 麻市所明 無玉 香和 明記の事ンガキで製のガキ 日網 謝を 化 切 呈 粧 4 柳

化生出 粧路通 新郎三 0 聞氏三 社宛六

取次所)川柳維誌社事務所 東京淺草區小島町二の二七 東京淺草區小島町二の二七 川柳きやり吟社 取次所

御

## 大贈右▼阪奥の川 題與下さい、 ・川柳の短冊、色 に関する。 ・川柳の短冊、色 に関する。 ・川柳の短冊、色

市住吉區平野西之町 色紙 v. あ れば 八雨三 御

## 蒐

雜誌( 柳に闘する 誌川 以柳 外報 12 記

寫真、 個 JI] 幾口でも

#### 7 P 1 モダン

選

引 愚妻松代の經營で、 今般左記の場所へ轉宅いたし 屯 立の程 小湖 少 西海 ン」を開店しました。 熱河 お願ひ致します。 省凌源 カフェ

岩 崎 柳 路

投 句 用

五○枚綴二冊 價金拾二錢 用箋を御使用下さい。 なるべく此 111 柳

申 込は本 錢社 設切手代用 (送料 (送料 可 共錢

#### 原稿はなる 柳家の名簿 申 込んで下さ べく簡単に願ひます。 と柳友交誼の為是非一口御申 七月十二日迄 廣告を募 見舞 0 平野 頁希望の方に限り金七圓。 五

込下さ

口分

◆申込期限 大阪市住吉區 111 柳 一人に掲載 四之町

話替

留大阪七五〇五〇 to 社 番番

### 御 挨 拶

荆妻外喜死去の際は御多忙中にも不拘、 有奉深謝候乍略儀以誌上御挨拶申上 h 且 は御懇篤な 7 御 弔辭 御 弔電を忝ふし 度如 斯御座候 遠路態々御會葬を 御芳情の段難

橋 本 綠

雨

111

養榮の髮毛ぬせ戟刺を髓腦

## トーフボ椿豆伊

